東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ　**66**：98－80，2015

白居易の茶と陸游の茶
―茶詩の対偶表現をてがかりとして―

高　橋　忠　彦*
（中国古典学分野）

要　旨

唐の白居易と宋の陸游は、それぞれの時代に最大数の茶詩を書き残しており、茶文化を研究する重要な資料となっている。本稿は、両者の茶詩において、「茶」がどのような言葉と対偶を構成しているかという観点から、その茶文化の特徴を具体的に検討したものである。

キーワード：茶文化、茶詩、白居易、陸游、対偶、唐詩、宋詩

はじめに

白居易（７７２～８４６）と陸游（１１２５～１２１０）は、それぞれ唐と宋において、最大数の詩を書き残しているが、同時に最大数の茶詩（ここでは、茶を主題とした詩に限らず、「茶」や「茗」を扱った詩全体をいう）を残している。

唐から宋という時代は、喫茶の風習が「煎茶」という形で完成し、伝統的な文化に取り入れられていった時期であり、詩にも、それが反映されている(注1)。盛唐期の詩から、はじめて「茶」が詩に取り入れられるが、高度な茶文化を打ち立てた陸羽の影響もあって、中唐以降は、「茶」の存在感が増してくる。ことに白居易は、六十数首の茶詩を残し、唐詩全体の茶詩が五百五十数首程度であるのに対して、その一割以上を占める。茶詩の数が多いだけでなく、白居易が茶を愛飲したことは、よく知られている(注2)。

宋代に入ると、点茶文化の勃興によって、茶が宮廷文化に入り込み、さらに存在感を増した。梅堯臣、欧陽脩らは、新たな茶詩の表現を打ち立て、蘇軾、黄庭堅らは、葉茶や煎茶まで視野に入れた、より複雑な茶を詠んだ。南宋の段階では、以上述べたような詩人の茶の表現が、すでに古典的な範例になりつつあったと思われる。南宋を代表する詩人の陸游は、両宋を通じて最大数の、三百五十数首の茶詩を書き残しており、彼の個性は含まれるものの、宋の茶のイメージを最も詳細に分析しうる、最良の資料と見ることができる。

また、白居易と陸游の茶詩を比較することで、唐から宋に至る茶文化の発展と変化について、どこに重点が存在するかを、おおまかであれ、うかがうことができよう。

もとより、そのためには、全ての茶詩の内容を分析すべきであるが、今回は、初歩的な試みとして、特に茶の対偶表現を取り上げた。詩における対偶表現は、ある概念を、特定の視点から見て関係性の強い他の概念と並挙する技法であるから、それ自体、概念同士の体系化の試みである。つまり、「茶」がどのような語との対偶関係に置かれているかを見れば、「茶」がどのような文化体系を構成していたかを考察することができると思われるのである。

*東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町４－１－１）

表1

西暦	製作年	題名	詩句	分類	対になる語	
800or801	貞元 16 or17	題施山人野居	春泥秧稲暖、夜火焙茶香。	A	茶	稲
809	元和 4	新楽府　昆明春	呉興山中罷榷茗、鄱陽坑裏休封銀。	B	茗	銀
810	元和 5	蕭員外寄新蜀茶	蜀茶寄到但驚新、渭水煎来始覚珍。	B	茶	水
811	元和 6	首夏病間	或飲一甌茗、或吟両句詩。	B	茗	詩
815	元和 10	題周皓大夫新亭子二十二韻	茶香飄紫筍、膾縷落紅鱗。	B	茶	膾
816	元和 11	春遊二林寺	陽叢抽茗芽、陰竇洩泉脈。	B	茗	泉
816	元和 11	詠意	或吟詩一章、或飲茶一甌。	B	茶	詩
816	元和 11	北亭招客	小醆吹醅嘗冷酒、深炉敲火炙新茶。	A	茶	酒
816	元和 11	遊宝称寺	酒嫩傾金液、茶新碾玉塵。	A	茶	酒
816	元和 11	春末夏初閑游江郭二首　一	嫩剥青菱角、濃煎白茗芽。	B	茗	菱
817	元和 12	香鑪峰下新置草堂即事詠懐題於石上	架巖結茅宇、斲壑開茶園。	B	茶園	茅宇
817	元和 12	食後	食罷一覚睡、起来両甌茶。	B	茶	睡
817	元和 12	重題　二	薬圃茶園為産業、野麋林鶴是交遊。	A C	茶	薬
817	元和 12	謝李六郎中寄新蜀茶	故情周匝向交親、新茗分張及病身。	A	新茗	故情
818	元和 13	清明日送韋侍御貶虔州	留餳和冷粥、出火煮新茶。	A	茶	粥
819	元和 14	江州赴忠州至江陵已来舟中示舍弟五十韻	甌汎茶如乳、台黏酒似餳。	B	茶	酒
820	元和 15	吟元郎中白鬚詩兼飲雪水茶因題壁上	吟詠霜毛句、閑嘗雪水茶。	A	茶	句
821	長慶 1	新居早春二首　二	呼童遣移竹、留客伴嘗茶。	A	茶	竹
821	長慶 1	新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士	蛮榼来方瀉、蒙茶到始煎。	A	茶	榼
822	長慶 2	山路偶興	泉憩茶数甌、嵐行酒一酌。	B	茶	酒
822	長慶 2	東院	老去歯衰嫌橘醋、病来肺渇覚茶香。	A	茶	橘
823	長慶 3	郡斎暇日辱常州陳郎中使君早春晩坐水西館書事詩十六韻見寄亦以十六韻酬之	徐傾下薬酒、稍爇煎茶火。	B	茶	薬
823	長慶 3	官舎	起嘗一甌茗、行読一巻書。	B	茗	書
823	長慶 3	偶作二首　二	或飲茶一醆、或吟詩一章。	B	茶	詩
824	長慶 4	履道新居二十韻	移榻臨平岸、携茶上小舟。	B	茶	榻
826	宝暦 2	春尽勧客酒	嘗酒留閑客、行茶使小娃。	A	茶	酒
826	宝暦 2	琴茶	琴裏知聞唯淥水、茶中故旧是蒙山。	A	茶	琴
828	大和 2	贈東鄰王十三	驅愁知酒力、破睡見茶功。	A	茶	酒
828	大和 2	鏡換栖	茶能散悶為功浅、萱縦忘憂得力遅。	A	茶	萱
828	大和 2	病仮中龐少尹携魚酒相過	閑停茶椀従容語、酔把花枝取次吟。	A	茶	花
829	大和 3 春	想東遊五十韻	客迎携酒榼、僧待置茶甌。	B	茶	酒
829	大和 3	自題新昌居止因招楊郎中小飲	春風小榼三升酒、寒食深炉一椀茶。	A	茶	酒
829	大和 3	宿杜曲花下	斑竹盛茶櫃、紅泥罨飯炉。	B	茶	飯
829	大和 3	蕭庶子相過	慇懃蕭庶子、愛酒不嫌茶。	C	茶	酒
830	大和 4	即事	室香羅薬気、籠煖焙茶煙。	A	茶	薬
830	大和 4	偶吟二首　二	晴教曬薬泥茶竈、閑看科松洗竹林。	A C	茶	薬･竹
830	大和 4	晩起	融雪煎香茗、調酥煮乳糜。	B	茗	糜
831	大和 5	府西池北新葺水斎即事招賓偶題十六韻	午茶能散睡、卯酒善銷愁。	B	茶	酒
832	大和 6	不出	簷前新葉覆残花、席上余栖対早茶。	A	茶	花
832	大和 6	酬夢得秋夕不寐見寄	病聞和薬気、渇聴碾茶声。	A	茶	薬
832	大和 6	重修香山寺畢題二十二韻以紀之	煙香封薬竈、泉冷洗茶甌。	B	茶	薬
833	大和 7	立秋夕有懐夢得	夜茶一両杓、秋吟三数声。	B	茶	吟
834	大和 8	晩春閑居楊工部寄詩楊常州寄茶同到因以長句答之	悶吟工部新来句、渇飲毗陵遠到茶。	A	茶	句
834	大和 8	早服雲母散	薬銷日晏三匙飯、酒渇春深一椀茶。	A	茶	飯
835	大和 9	睡後茶興憶楊同州	此処置繩牀、傍辺洗茶器。	B	茶器	繩牀
835	大和 9	何処堪避暑	遊罷睡一覚、覚来茶一甌。	B	茶	睡
835	大和 9	宿酲	挙頭中酒後、引手索茶時。	A	茶	酒
835	大和 9 or 開成 1	新亭病後獨坐招李侍郎公垂	趁暖泥茶竈、防寒夾竹籬。	B	茶	竹
836	開成 1	閑臥寄劉同州	鼻香茶熟後、腰暖日陽中。	A	茶	日
836	開成 1	池上逐涼二首　二	櫂遣禿頭奴子撥、茶教纖手侍児煎。	A	茶	櫂
840	開成 5	継之尚書自余病来寄遺非一又蒙覧酔吟先生伝題詩以美之今以此篇用伸酬謝	茶薬贈多因病久、衣裳寄早及寒初。	A	茶薬	衣裳

A　近体詩の対偶　　B　古体詩の対偶　　C　当句対　　D　扇対

表1は、白居易の作製した茶詩のうちから、「茶」を用いた明瞭な対偶表現を抜き出したものである[注3]。Aは、近体詩における対偶（対句）、Bは、古体詩における対句であり、Cは、一つの句の中で「茶」と別語が対を構成する、いわゆる当句対である。「茶」もしくは「茗」と対になる一語を示したが、二字熟語の対として扱わざるをえない場合のみ、二字の語を示した。

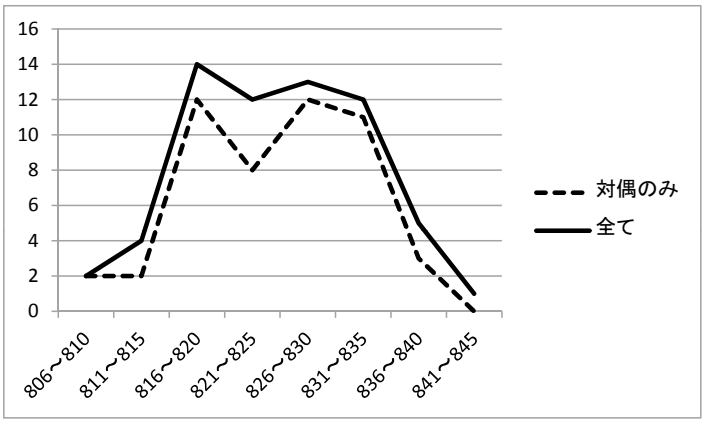
この表1からわかるように、白居易が「茶」と対にしている語は、多様ではあるが、一定の傾向を示す。「酒」が圧倒的に多く、「薬」と「詩」がそれに次いで拮抗し、他に、「竹」、「泉」（「水」を含む）、「粥」（「糜」を含む）、「睡」、「花」などの語が、二回ずつ使われている。これを手がかりにして、白居易が「茶」について抱いていたイメージを確認することは可能であろう。

【白居易の茶詩の作成時期】

現存する詩の範囲で、白居易がいつごろから茶を詩に詠んでいるかを考えると、貞元十六、七年（八〇〇、一）頃の作といわれる「題施山人野居」が古く、まだ白居易三十歳の頃である。また、白居易の茶詩の代表作とも目される「蕭員外寄新蜀茶」、「首夏病間」が、元和五年、六年（八一〇、一）に書かれているので、白居易の茶の詩境は、必ずしも晩年に老成して完成したものとは言い切れない。

とはいえ、表2に示したとおり、元和十年（八一五）に江州司馬に左遷された時期から、茶詩の製作数が急増している。この表2（茶詩全ての数を五年ごとに数えたものと、「茶」の対偶の数のみを数えたものを、別の折れ線で示した）を見ると、二つのピークがあるが、第一は、江州司馬にあった期間（815～819）、第二は蘇州刺史から帰り、洛陽で高官を歴していた時期（たとえば河南尹の任に在ったのは830～833）と重なる。晩年にはその数は減少したようである。

表2



自居易は、比較的若い時期から熟成した茶詩を詠んではいるものの、やはり、江州、杭州、蘇州で江南の茶文化に触れたことと、洛陽で邸宅を構え、官に有りながら精神的な隠逸の生活を長く送ったことが、大量の茶詩を生み出したものといえよう。

【酒との対について】

白居易の茶詩において、「茶」が「酒」と対になるケースが最大の十二例に上るのは、もとより異とするに足りない。なぜなら、白居易が酒を詠むこと自体、茶とは比較にならないほど多いからである。これは、もちろん唐の詩人の常ということもできるが、江州に左遷され、陶淵明を敬愛した白居易においてはなおさらであった。

もともと茶は酒の代替物として使用された過去がある[注4]。それは、「煎茶」が発展するはるか以前のことであったが、茶と酒が並び称されることは、理論的には古くからありえたのである。さらに、酒には酩酊を招く力があり、茶には覚醒をもたらす功能があったため、両者を対にする発想も、おそらく白居易にとっては常識的なものであり、彼の独創ということはあり得ない。

実際、唐詩全体を通覧すると、茶と酒の対偶は珍しくないし、白居易に先行する例は多い。戴叔倫の「南野」には、「茶烹松火紅、酒吸荷杯緑（茶は烹て松火は紅、酒は吸いて荷杯は緑なり）」とあり、色彩的にも完璧な対をなす。また、高適は茶と酒の優劣を比較して、「同群公宿開善寺贈陳十六所居」で「読書不及経、飲酒不勝茶（書を読むは経に及ばず、酒を飲むは茶に勝らず）」と詠み、酒と茶の優劣を比較している。盛唐期には、茶と酒を対にすることは当然のことになっていたとみてよい。さらに、白居易との応酬の詩において、その親友劉禹錫は、「詶楽天閑臥見寄」で「詩情茶助爽、薬力酒能宣（詩情は茶爽（あきら）かなるを助け、薬力は酒能く宣ぶ）」と述べ、「茶」が「詩」に及ぼす効力を説いているが、白居易もこの発想を共有していたことであろう。

白居易自身が、「茶」と「酒」を対にした例を挙げると、「北亭招客」の「小

醆吹醅嘗冷酒、深炉敲火炙新茶（小醆に醅を吹いて冷酒を嘗め、深炉に火を敲ちて新茶を炙る）」、「遊宝称寺」の「酒嫩傾金液、茶新碾玉塵（酒は嫩にして金液を傾け、茶は新しくして玉塵を碾く）」、「江州赴忠州至江陵已来舟中示舍弟五十韻」の「甌汎茶如乳、台黏酒似餳（甌に汎びて茶は乳の如く、台に黏りて酒は餳に似る）」、「新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士」の「蛮榼来方瀉、蒙茶到始煎（蛮榼来りて方に瀉ぎ、蒙茶到りて始めて煎る）」、「山路偶興」の「泉憩茶数甌、嵐行酒一酌（泉に憩いて茶数甌、嵐に行きて酒一酌）」、「春尽勧客酒」の「嘗酒留閑客、行茶使小娃（酒を嘗めて閑客を留め、茶を行らすに小娃を使う）」、「贈東鄰王十三」の「駆愁知酒力、破睡見茶功（愁を駆りて酒力を知り、睡を破りて茶功を見る）」、「想東遊五十韻」の「客迎携酒榼、僧待置茶甌（客は迎えて酒榼を携え、僧は待ちて茶甌を置く）」、「自題新昌居止因招楊郎中小飲」の「春風小榼三升酒、寒食深炉一椀茶（春風の小榼三升の酒、寒食の深炉一椀の茶）」、「蕭庶子相過」の「慇懃蕭庶子、愛酒不嫌茶（慇懃たる蕭庶子、酒を愛して茶を嫌わず）」、「府西池北新葺水斎即事招賓偶題十六韻」の「午茶能散睡、卯酒善銷愁（午茶は能く睡を散じ、卯酒は善く愁を銷す）」、「宿酲」の「挙頭中酒後、引手索茶時（頭を挙ぐ酒に中る後、手を引く茶を索むる時）」である。この十二例における喫茶飲酒の場面は一定ではないが、半数以上は自宅で茶を楽しんでいる詩である。「茶」と「酒」が相まって生活に欠かせない主要な飲料となっている様子がうかがえる。「茶」と「睡」の関係については後述する。

ところで白居易に限らず、唐詩で「雪」「月」「花」などの自然美は、酒宴など、「酒」がともなう華やかな場面で画かれることが多い。それを前提として、釈皎然は、重陽の宴を陸羽とともにしたことを詠んだ「九日与陸処士羽飲茶」において、菊の花について、「俗人多泛酒、誰解助茶香（俗人は多く酒に泛ぶるも、誰か茶香を助くるを解す）」と述べている。このような、「茶」をもって「酒」の機能に替えるという発想は、唐詩以来往々にして登場してくる。白居易が、「宿藍渓対月」で「清影不宜昏、聊将茶代酒（清影は宜しく昏ますべからず、聊か茶を将て酒に代ゆ）」と詠うのもその一例で、酔った目で明月を見るのはもったいないので、酒をやめて茶を飲んだという意である。とはいえ、白居易の茶詩では、そのような傾向が強いとはいえず、「雪」「月」「花」の美にともなうのは、基本的に「酒」である。

【詩との対について】

「首夏病間」の「或飲一甌茗、或吟両句詩（或いは一甌の茗を飲み、或いは両句の詩を吟ず）」、「詠意」の「或吟詩一章、或飲茶一甌（或いは吟ず詩一章、或いは飲む茶一甌）」、「吟元郎中白鬚詩兼飲雪水茶因題壁上」の「吟詠霜毛句、閑嘗雪水茶（霜毛の句を吟詠し、閑かに雪水の茶を嘗む）」、「偶作二首　二」の「或飲茶一醆、或吟詩一章（或いは飲む茶一醆、或いは吟ず詩一章）」、「立秋夕有懐夢得」の「夜茶一両杓、秋吟三数声」、「晩春閑居楊工部寄詩楊常州寄茶同到因以長句答之」の「悶吟工部新来句、渇飲毗陵遠到茶（悶吟す工部の新来の句、渇飲す毗陵の遠到の茶）」において、白居易は、「詩」と「茶」を対にしているが、ここの「詩」ほぼすべて「吟」つまり朗詠をともなう。常日頃の習慣として、朗詠と喫茶をあわせ楽しんで、日々を過ごしていたことを示す。ここで「茶」と「詩」は、閑適生活の象徴となっている。元来、詩の朗詠は酔って行う行為でもあり、「酒」と結びつきやすい概念であるし、白居易自身の詩にもその例は多い。白居易があえて「酒」を「茶」に取り替えたのだとしたら、注目すべきことである。

ここで往々にして言及される、「一甌の茶」を飲むという行為については、別に論じたことがあるが（注5）、大ぶりの茶碗でゆったりと茶を味わう行為に他ならない。「甌」は、三百cc程度をいれる湯飲み状の茶器である。茶をゆったりと味わいながら、自由で穏やかな心境で、詩の朗詠をするのであり、酒宴で盛り上がって詩を朗読するのとは、また違った境地を表している。

【薬との対について】

中国では道教と薬物学が結びついたこともあって、薬は、長生を求めて山中で採薬する道士のイメージと重なり、隠逸の生活にふさわしい存在とされた。一方、「茶」は、単純に長生の薬と認識されたかどうかは疑わしいが、薬のように煮て飲む健康飲料として、「薬」の語と対になりやすかったのであろう。

白居易以前にも、韓翃の「尋胡処士不遇」に「微風吹薬案、晴日照茶巾（微風薬案を吹き、晴日茶巾を照らす）」とある。これは、まさに山中の隠者が、自らの服する薬を机に並べて干して、その脇に茶を飲む習慣を示すように、茶巾が干してあるのであろう。皇甫冉の「尋戴処士」の「曬薬竹斎暖、搗茶松院

深（薬を曬して竹斎暖く、茶を搗きて松院深し）」は、竹と松に囲まれて住み、薬を干し、茶を搗いて作っている典型的な隠者の姿を描く。

このように完成した「茶」と「薬」の対偶を引き継ぎ、白居易は六つの詩において、この対を用いている。「重題　二」の「薬圃茶園為産業、野麋林鶴是交遊（薬圃と茶園を産業と為し、野麋と林鶴は是れ交遊なり）」、「郡斎暇日辱常州陳郎中使君早春晩坐水西館書事詩十六韻見寄亦以十六韻酬之」の「徐傾下薬酒、稍熱煎茶火（徐ろに薬を下す酒を傾け、稍ぼ茶を煎る火を熱す）」、「即事」の「室香羅薬気、籠煖焙茶煙（室には香る薬を羅うの気、籠は煖し茶を焙るの煙）」、「偶吟二首　二」の「晴教曬薬泥茶竈、閑看科松洗竹林（晴れては薬を曬して茶竈を泥し、閑かに松を科（き）りて竹林を洗うを看る）」、「酬夢得秋夕不寐見寄」の「病聞和薬気、渇聴碾茶声（病みては薬を和するの気を聞き、渇しては茶を碾くの声を聴く）」、「重修香山寺畢題二十二韻以紀之」の「煙香封薬竈、泉冷洗茶甌（煙は香りて薬竈を封じ、泉は冷くして茶甌を洗う）」がそれであり、「継之尚書自余病来寄遺非一又蒙覧酔吟先生伝題詩以美之今以此篇用伸酬謝」には、「茶薬」という連語も見える。これらの例を見ると、廬山の草堂であれ、杭州刺史の役所であれ、「薬」と「茶」が存在することが、そこに隠逸の精神を帯びさせているのであり、文脈によっては、病や老を連想させる機能も持つ。

【竹との対について】

竹は、従来より、「節操」などの連想から、隠逸の世界をイメージさせる植物であった。詩の世界で茶が竹と対偶関係を結んでいったのは、茶が隠逸の飲料として認識されていったことを示していよう。結果的に、茶文化は江南（および福建）を中心に発展したが、この地域は、竹が重要な植生を構成している。そのため、詩というイメージの世界だけでなく、実物の竹も、茶の包装、茶具の材料など、多様な形で茶文化にかかわる結果となった。

唐代の詩では、「茶」と「竹」を対にすることが多く、白居易以前にも、岑参の「暮秋会厳京兆後庁竹斎」に「甌香茶色嫩、窓冷竹声乾（甌は香りて茶色は嫩く、窓は冷しくして竹声は乾く）」、韓翃の「送南少府帰寿春」に「淮風生竹簟、楚雨移茶竈（淮風竹簟に生じ、楚雨茶竈を移す）」、戴叔倫の「与友人過山寺」に「竹暗閉房雨、茶香別院風（竹は暗し房を閉ざす雨、茶は香る院を別つ風）」などとある。唐詩全体で見れば、全体で十八例、白居易には三例を数える。

すなわち、白居易の「新居早春二首　二」に「呼童遣移竹、留客伴嘗茶（童を呼びて竹を移さしめ、客を留めて茶を嘗むるに伴わしむ）」、「偶吟二首　二」に「晴教曬薬泥茶竈、閑看科松洗竹林（晴れては薬を曬して茶竈を泥せしめ、閑かに松を科（き）りて竹林を洗うを看る）」、「新亭病後獨坐招李侍郎公垂」に「趁暖泥茶竈、防寒夾竹籬（暖に趁（したが）いて茶竈を泥し、寒を防ぎて竹籬を夾む）」とあるが、いずれも、閑居の環境に、竹と茶が重要だと表明しており、戸外の情景を詠むことに用いられている。二度用いられている「泥茶竈」は、茶の湯を湧かす竈を泥で補修するという意味であろう。「茶竈」の語は、唐では韓翃も用いているが、後に陸游が好んで用いるところとなった。

【水との対について】

唐代の茶文化の発展において、水が重視されたことは、『茶経』や『煎茶水記』からうかがえる。特に後者は、各地の、茶にふさわしい「名泉」という概念を定着させた。『茶経』には、そのような名泉に関する言及こそ無いが、「山水上、江水中、井水下」という言説からわかるように、山中の泉の水を尊重する考えを普及させた。このような名水文化は、詩の世界にも影響を与えたと思われる。劉言史に「与孟郊洛北野泉上煎茶」つまり、泉のほとりで茶を煮るという作品があるのも、その現れである。白居易が「蕭員外寄新蜀茶」の「蜀茶寄到但驚新、渭水煎来始覚珍（蜀茶寄せ到りて但だ新らしきに驚き、渭水煎じ来りて始めて珍なるを覚ゆ）」と、「春遊二林寺」の「陽叢抽茗芽、陰竇洩泉脈（陽叢には茗芽を抽（ぬきい）で、陰竇より泉脈を洩らす）」の二カ所において、「茶」と「水」もしくは「泉」を対にしているのは当然であろう。とはいえ、後者は茶が泉の水によって育まれていること、もしくは、洞窟から流れる泉水が茶にふさわしいことを、暗示しているに過ぎない。ただ、白居易が「茶の水」にこだわっていたことは、「吟元郎中白鬚詩兼飲雪水茶因題壁上」の「吟詠霜毛句、閑嘗雪水茶（霜毛の句を吟詠し、閑かに雪水の茶を嘗む）」からも推測できることである。他の唐詩の中で、喫茶の場面を詠んで「水」と「茶」を対にしているものが皆無であることを考慮すると、白居易の構成した「蜀茶と渭水」の対偶は、後世への影響が、それなりに大であったと考えられる。

【粥との対について】

「清明日送韋侍御貶虔州」に「留餳和冷粥、出火煮新茶（餳を留めて冷粥に和し、火を出だして新茶を煮る）」とあるのは、江州において、左遷される知人を見送った時の、わびしげな詩の一部であり、「飴をいれた冷たい粥」と「その場で煮た今年の新茶」が、友人へのもてなしとして述べられるが、おそらくは酒や肉のような華やかさの対極として描かれているのであろう。

また、「晩起」に「融雪煎香茗、調酥煮乳糜（雪を融して香茗を煎、酥を調えて乳糜を煮る）」とあるのは、晩年の日常を、「雪を溶かした水で茶を煮たり、バターをいれて粥を煮たり」と詠むものであり、詩の背景はかなり異なるものの、「茶」と「粥」の持つ質素さは共通している。また、「乳糜」「乳粥」は、仏典に見え、粥が僧侶の食物であったことも考慮すべきであろう。仏教信徒としての白居易は、「斎居」に「香火多相対、葷腥久不嘗。黄耆数匙粥、赤箭一甌湯（香火は多く相い対し、葷腥は久しく嘗めず。黄耆数匙の粥、赤箭一甌の湯）」とあるのを挙げるまでもなく、粥を常食していたと思われる。なお、他の唐詩に「茶」と「粥」を対にするものは無く、この発想は白居易独自のものということができる。

【睡との対について】

「食後」の「食罷一覚睡、起来両甌茶（食罷りて一び睡より覚め、起き来りて両甌の茶）」は、「睡」と「茶」を対にした例であるが、後年の作「何処堪避暑」の「遊罷睡一覚、覚来茶一甌（遊び罷りて睡一び覚め、覚め来りて茶一甌）」は、それを再使用したものであろう。昼寝の後の一甌の茶というイメージは、茶を閑適生活に取り込んだ、いかにも白居易らしい表現である。

この種の茶のイメージは、白居易の「贈東鄰王十三」に「駆愁知酒力、破睡見茶功（愁を駆りて酒力を知り、睡を破りて茶功を見る）」、「府西池北新葺水斎即事招賓偶題十六韻」に「午茶能散睡、卯酒善銷愁（午茶は能く睡を散じ、卯酒は善く愁を銷す）」として、茶との対比において強調され、眠気覚ましの茶の楽しみは、詩の題としても、「睡後茶興憶楊同州」と述べられている。これは、眠気を去るという伝統的な茶の薬効を、文人文化の一部にまで高めたものである。親友の元稹の「解秋十首　六」に「簟涼朝睡重、夢覚茶香熟（簟涼しくして朝睡重く、夢覚めて茶香熟す）」とあるのは、この境地を共有したものといえる。

【花との対について】

茶と花の対偶も二回用いられている。いずれも晩年の詩、「病仮中龐少尹携魚酒相過」の「閑停茶椀従容語、酔把花枝取次吟（閑かに茶椀を停めて従容として語り、酔いて花枝を把りて取次に吟ず）」と、「不出」の「簷前新葉覆残花、席上余栖対早茶（簷前の新葉は残花を覆い、席上の余栖は早茶に対す）」である。前者は友人との宴を詠み、静かに飲む茶と、陽気に詩を吟じながら、花の枝を手にして飲む酒を対比させているが、時間的な差があると見てよいだろう。後者は、若葉と残花によって季節の推移を述べた句と、昨晩の酒と今朝の茶を対比させて作者の日常を描いた句を対比させている。したがって、両者とも、厳密には「茶」と「花」を対立項として認識したものではなく、「花」に対応するものは「酒」である。これについては、「酒」に関連して上でも述べた。

ただ、広い意味で言えば、ともに閑適生活の一部として身近に花と茶があるのであり、薛能の「春日閑居」に「花繁くして春正に王（さか）んにして、茶美しくして夢初めて驚く（花繁春正王、茶美夢初驚）」とある「茶」も、白居易とかけ離れたイメージではない。

【茶と酒・薬・詩】

白居易の茶詩において、「茶」と対になる言葉としては、「酒」「薬」「詩」「睡」が際立っており、これらの関係については、まとめて考察する必要がある。たとえば、「食罷一覚睡、起来両甌茶」の如き表現は、上述の「或吟詩一章、或飲茶一甌」と形式的には酷似しているので、「睡」と「詩」が有る意味で対応していることになる。このように他の諸概念も、それぞれ関係性を持って位置づけることができよう。

「茶」はそもそも新興の詩語であり、盛唐から使用が始まったとはいえ、他の詩語との関係は不安定であった。これが、それぞれ「酒」「薬」「詩」「睡」などと結びつき、一定の体系を構成したのは、白居易を含む中唐の詩人たちの功績であると推定される。事情は複雑であるが、中心になるのは、「薬」と「酒」の二語ではないかと思われる。

顕著な現象として注目されるのは、初唐から盛唐にかけては、「酒」「詩」と「薬」は、あまり対偶をなさなかったということである。ほぼ唯一の例が独孤及の「与韓侍御同尋李七舍人不遇、題壁留贈」で、友人の家の様子を「薬院鶏

犬静、酒壚苔蘚班（薬院に鶏犬静かにして、酒壚に苔蘚班く）」と詠んでいるが、薬を作ったり保存したりする部屋（薬院）と、酒の甕を置く台を点景として描写したにすぎず、「薬」と「酒」にさほど深い関係を見いだしているとはいえない。

盛唐以前の詩では、「薬」は「書」（道書や方書の意）と対になることが多く、山中の道士が長生薬を作っている場面が多く、「酒」や「詩」と対を構成しない。「酒」（これが「詩」と結びつくことについては、説明を要しないだろうが）はむしろ、長生に反する存在である。「酒」と「薬」が相反することは、盧綸の「贈韓山人」に「見君何事不慚顔、白髪生来未到山。更嘆無家又無薬、往来唯在酒徒間（君を見るに何事か顔に慚じざらん、白髪生い来りて未だ山に到らず。更に嘆く家無くして又た薬無きを、往来して唯だ酒徒の間に在り）」と描かれている。

山中で長生に専念する生き方と、世間で酒を飲んで自由に詩を作る生き方が、次第に相反するものとは考えられなくなると、「酒」と「薬」の対も登場する。その典型が、白居易の親友たる劉禹錫で、「酬楽天閑臥見寄」に「詩情茶助爽、薬力酒能宣（詩情は茶爽かなるを助け、薬力は酒能く宣ぶ）」とあるのは、そもそも白居易の生活を詠んだものである。同じく白居易と応酬した詩「酬楽天晩夏閑居欲相訪先以詩見貽」にも「酒醅晴易熟、薬圃夏頻薅（酒醅は晴れて熟し易く、薬圃は夏に頻りに薅す）」とある。白居易自身、「早服雲母散」では「薬銷日晏三匙飯、酒渇春深一碗茶（薬は銷す日晏き三匙の飯、酒は渇す春深き一碗の茶）」、「郡斎暇日辱常州陳郎中使君早春晩坐水西館書事詩十六韻見寄亦以十六韻酬之」では「徐傾下薬酒、稍熱煎茶火（徐ろに薬を下す酒を傾け、稍ぼ茶を煎る火を熱す）」と述べており、「薬」と「酒」の関係が、「茶」が加わることで構築された様子がうかがわれるのである。

なお、「茶」の問題とは、ややずれるが、「下薬酒」（薬を飲み下すための酒）という言葉にも注目したい。この表現は白居易しか用いていないが、「薬」と「酒」をない交ぜにした象徴ともいえる。ただし、似た表現として、張籍の「書懐寄王秘書」に「下薬遠求新熟酒、看山多上最高楼（薬を下さんとして遠く求む新熟の酒、山を看んとして多く上る最高の楼）」、元稹の「酬段丞与諸棋流会宿弊居見贈二十四韻」に「僧請聞鐘粥、賓催下薬卮（僧は請う鐘を聞くの粥、賓は催す薬を下すの卮）」とあり、中唐期に詩に用いられ始めたものと想像される。

要するに、「薬」と「詩・酒」は、本来つながりの薄い関係であったのだが、中唐期に「茶」がそれぞれと関係を結ぶことで、「茶」「酒」「薬」「詩」四者の間につながりが生じたらしく、それをもっとも明瞭に表現しているのが、恐らくは白居易なのである。これに「睡」「粥」を加えれば、白居易の日常をほぼ言い尽くすことができる。図1は、それを図式化する試みである。実線は近縁関係、破線はある種の対立を示すが、「茶」がある意味で中心にあることが見て取れよう。「酒」を飲んで花鳥風月を愛で、詩を朗詠するというのも、白居易の詩の大いなる一面であるが、「茶」を味わって閑静な一日を過ごすという一面も目立つということが理解できよう。

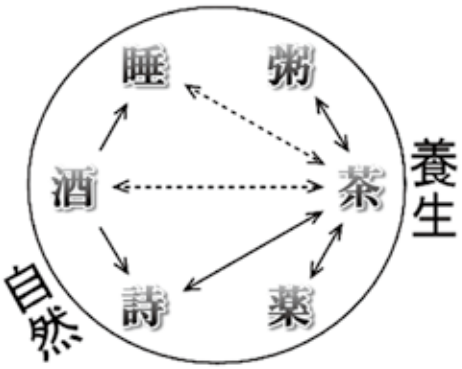


図1

【唐の茶詩における白居易の対偶の特徴】

白居易の茶詩に見える茶の対偶表現と、そこからうかがえる茶の位相は、唐の茶文化を代表するものといってよいが、唐の他の茶詩と全く同一というわけではない。今回、唐の茶詩全てについて細かく論ずる余裕はないが、その違いを表にして示すと図1のようになる。

表3は、白居易の使用した茶の対偶の数が、二を越えるもの、及び、『全唐詩』に見える茶の対偶の数が、四を越えるものを挙げたものである。その結果は、次のようにまとめられる。

一、白居易が茶と対偶とした語は、「酒」が最大で、「薬」、「詩」と続くが、全体としては、『全唐詩』に見る結果と似通っている。

一、白居易が二回使用しながら、『全唐詩』に他に見えないのが、「粥・糜」および「睡」である。これについては、上で説明したが、白居易の特殊な生活感覚、つまり閑適のイメージを反映したものということができる。ところで、

食物としての「粥・糜」は、六朝の詩では全く用いられないし、「睡」も極めて少ない。「粥をすする」とか「昼寝をする」とかを詩に詠むこと自体が、唐詩以降の感覚なのであるが、白居易はやはり新語たる「茶」を、それに融合させたことになる。

一、『全唐詩』に四回以上使用されながら、白居易が一度も使っていない対偶の語がいくつか存在する。「雪」「碁」「松」「草」「墨」「月」「香」である。一方で、これらの「詩的な」語を、白居易が詩において多用していることはいうまでもなく、ただ、「茶」と対にすることがないということである。これは白居易の「個性」であり、合理的な説明をすることは難しい。強いていえば、「茶」を「雪」「松」「月」「草」と対にしないことは、大きな自然の中より、家の中で味わう飲料としての「茶」の機能を重視していると解釈できようか。これは、表3にも現れている。

一、唐詩全体として茶の位相を考える際には、白居易が対にした言葉だけでなく、「雪」「碁」「松」「草」「墨」「月」「香」も見落とすべきではない。これらの伝統的な詩語が、唐代には、新興の「茶」と結びついて、自然の美や隠逸の心情を表現しつつあったということは確認したい。

表3

	白居易	白居易以外	全唐詩全体
酒（1）	12	43	55
詩（2）	6	9	15
薬	6	17	23
竹	3	15	18
花	2	8	10
泉（3）	2	7	9
粥・糜	2	0	2
睡	2	0	2
雪	0	8	8
碁	0	8	8
松	0	7	7
草	0	4	4
墨	0	4	4
月	0	4	4
香（4）	0	4	4

（1）酒には、榼・觴・杯・醅・壺・酳を含む
（2）詩には、句・吟・巻・偈を含む
（3）泉には、水を含む。
（4）香には、沈屑を含む。

二、対偶より見た茶の位相―陸游の場合

表4

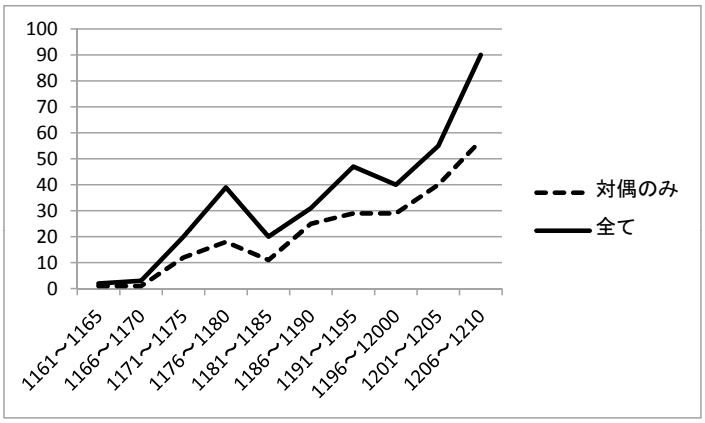
西暦	製作年	題名	詩句	分類	対になる語	
1157	紹興 27	酬妙湛闍梨見贈妙湛能棋其師璘公蓋嘗与先君遊云	山店煎茶留小語、寺橋看雨待幽期。	A	茶	雨
1162	紹興 32	過林黄中食柑子有感学宛陵先生体	薬分臘剤香、茶泛春芽白。	A	茶	薬
1169	乾道 4	題徐子礼宗丞自覚斎	茶熟松風生石鼎、香残雲縷遶蒲團。	A	茶	香
1171	乾道 7	西斎雨後	香碗灰深微炷火、茶鐺声細緩煎湯。	A	茶	香
1172	乾道 8	成都歳暮始微寒小酌遣興	革帯頻移紗帽寛、茶鐺欲熟篆香残。	A	茶鐺	革帯
1173	乾道 9	聞王嘉叟訃報有作	地炉燔栗美芻豢、石鼎烹茶当醪醴。	B	茶	栗
1173	乾道 9	雨中睡起	松鳴湯鼎茶初熟、雪積炉灰火漸低。	A	茶	火
1173	乾道 9	独坐	茶鼎松風吹謖謖、香奩雲縷散霏霏。	A	茶	香
1174	淳熙 1	晨雨	青蒻雲腴開闘茗、翠甕玉液取寒泉。	A	茗	泉
1174	淳熙 1	慈雲院東閣小憩	香濃煙穗直、茶嫩乳花円。	A	茶	香
1174	淳熙 1	夏日湖上	茶竈遠従林下見、釣筒常向月中収。	A	茶	釣
1174	淳熙 1	寓居小庵纔袤丈戯作	猶能設胡床、相喚共茗椀。	B	茗椀	胡床
1174	淳熙 1	儲福観	緑蘚封茶樹、清霜折薬花。	A	茶	薬(芍薬)
1174	淳熙 1	初到栄州	地炉堆獸熾石炭、瓦鼎号蚓煎秋茶。	B	茶	炭
1175	淳熙 2	午寝	灰冷香煙無復在、湯成茶椀径須持。	A	茶	香
1176	淳熙 3	飯昭覚寺抵暮乃帰	静院春風伝浴鼓、画廊晩雨湿茶煙。	A	茶煙	浴鼓
1176	淳熙 3	卜居二首　其二	雪山水作中冷味、蒙頂茶如正焙香。	A	茶	水
1176	淳熙 3	野意	茶経每向僧窓読、孤米仍於野艇炊。	A	茶	孤
1176	淳熙 3	閑中偶題二首　其一	只知閑味如茶永、不放羈愁似草長。	A	茶	草
1177	淳熙 4	晩過保福	茶試趙坡如潑乳、芋来犀浦可専任車。	A	茶	芋
1177	淳熙 4	幽居二首　　其一	得飽罷揮求米帖、愛眠新著毀茶文。	A	茶	米
1177	淳熙 4	別後寄季長	煎茶憩野店、喚船截煙津。	B	茶	船
1177	淳熙 4	道室夜意	茶鼎声号蚓、香盤火度螢。	A	茶	香
1178	淳熙 5	大堤	列肆居茶估、連営宿戍兵。	A	茶估	戍兵
1178	淳熙 5	舟中偶書	昼眠初起報茶熟、宿酒半醒聞雨来。	A	茶	雨
1179	淳熙 6	病中久止酒有懐成都海棠之盛	説与故人応不信、茶煙禅榻鬢成糸。	C	茶煙	禪榻
1179	淳熙 6	伏中官舎極涼戯作	客愛炊孤美、僧誇瀹茗香。	A	茗	孤
1179	淳熙 6	客意	早因食少妨高臥、晩憶茶甘作遠遊。	A	茶	食
1180	淳熙 7	初春懐成都	病来幾与麴生絶、禅榻茶煙双鬢糸。	C	茶煙	禪榻
1180	淳熙 7	簡黎道士	道人昔是茶山客、病叟新為薬市遊。	A	茶	薬
1180	淳熙 7	遊疏山	曳杖行穿嗜冢雲、試茶手挹香渓水。	B	茶	杖
1180	淳熙 7	小憩前平院戯書觸目	村墟売茶已成市、林薄打麦惟聞声。	B	茶	麦
1180	淳熙 7	晩晴至索笑亭	堂空響棋子、盞小聚茶香。	A	茶	棋
1181	淳熙 8	雪中登雲泉上方	煎茶誇坐客、打竹課蛮童。	A	茶	竹
1181	淳熙 8	大雪歌	銀杯拌蜜非老事、石鼎煎茶且時啜。	B	茶	蜜
1181	淳熙 8	喜晴	開書頓失昏花墜、試茗初看白乳新。	A	茗	書
1181	淳熙 8	睡	凍醪有力勤推挽、春茗無端苦破除。	A	茗	醪
1183	淳熙 10	秋思	委轡看山無鉄獺、拾樵煎茗有青猿。	A	茗	山
1183	淳熙 10	擁炉	鳧鼎煎茶非俗物、雁燈開巻愜幽情。	A	茶	巻
1184	淳熙 11	閑居書事	玩易焚香消永日、聴琴煮茗送残春。	AC	茗	琴
1184	淳熙 11	幽事	快日明窓閑試墨、寒泉古鼎自煎茶。	A	茶	墨

西暦	製作年	題名	詩句	分類	対になる語	
1185	淳熙12	秋夜歌	茶鐺颼颼候湯熟、燈檠菽菽看燼落。	B	茶	燈
1185	淳熙12	題徐淵子環碧亭亭有茶山曾先生詩	速宜力置竹葉酒、不用更瀹桃花茶。	B	茶	酒
1185	淳熙12	雪中作	屬国餐氈真強項、翰林煮茗自風流。	A	茗	氈
1186	淳熙13	思蜀	柑美傾筠籠、茶香出土鐺。	A	茶	柑
1186	淳熙13	臨安春雨初霽	矮紙斜行閑作草、晴窓細乳戲分茶。	A	茶	草
1186	淳熙13	春遊至樊江戲示坐客	酴醾爛漫我欲狂、茗芋還家君勿遽。	B	茗芋	酴醾
1186	淳熙13	遊法雲寺観彝老新葺小園	竹筧引泉滋薬壟、風炉篝火試茶杯。	A	茶	薬
1186	淳熙13	小憩村舍	小婦簒新麦、群童摘晩茶。	A	茶	麦
1186	淳熙13	雲門過何山	思酒過野店、念茶叩僧扉。	B	茶	酒
1186	淳熙13	自上竈過陶山	蚕家忌客門門閉、茶戸供官処処忙。	A	茶	蚕
1186	淳熙13	題斎壁四首　其二	甘寝毎憎茶作祟、清狂直以酒為仙。	A	茶	酒
1186	淳熙13	坐客有談狄魚眼眶之美者感嘆而作	不妨瓦缽飽晩菘、更汲山泉試春茗。	B	茗	菘
1186	淳熙13	登北榭	香浮鼻観煎茶熟、喜動眉間煉句成。	A	茶	句
1186	淳熙13	歳晩懐故人	客抱琴来聯瀹茗、吏封印去又哦詩。	A	茗	詩
1186	淳熙13	病告中遇風雪作長歌排悶	石鼎閑烹似爪茶、霜皺旋破如拳栗。	B	茶	栗
1187	淳熙14	春晴	風和已染柳千縷、山冷未開茶一旗。	A	茶	柳
1187	淳熙14	大閲後一日作仮	下巌紫壁臨章草、正焙蒼龍試貢茶。	A	茶	草
1187	淳熙14	初夏燕堂睡起	晨几硯凹涵墨色、午窓杯面聚茶香。	A	茶	墨
1187	淳熙14	初寒在告有感三首　其一	銀毫地緑茶膏嫩、玉斗糸紅墨瀋寛。	A	茶	墨
1188	淳熙15	釣臺見送客罷還舟熟睡至覚度寺	詩情森欲動、茶鼎煎正熟。	B	茶	詩
1188	淳熙15	七月十日到故山削瓜瀹茗翛然自適	瓜冷霜刀開碧玉、茶香銅碾破蒼龍。	A	茶	瓜
1188	淳熙15	飯罷忽鄰父来過戯作	茶味森森留歯頰、香煙郁郁著図書。	A	茶	香
1188	淳熙15	過猷講主桑瀆精舍	講罷縄床懸麈柄、斎余童子供茶杯。	A	茶杯	麈柄
1188	淳熙15	泛湖	筆床茶竈釣魚竿、瀲瀲平湖淡淡山。	C	茶	筆
1188	淳熙15	行飯至新塘夜帰	凄迷籬落開寒菊、鄭重比鄰設夜茶。	A	茶	菊
1189	淳熙16	到家旬余意味甚適戯書	石鼎颼颼閑煮茗、玉徽零落自修琴。	A	茗	琴
1189	淳熙16	雪夜作	龍茶与羔酒、得失不足評。	C	茶	酒
1190	紹熙1	寓嘆三首　其一	嫩湯茶乳白、軟火地炉紅。	A	茶乳	地炉
1191	紹熙2	山居	茶磑細香供隠几、松風幽韻入哦詩。	A	茶	松
1191	紹熙2	示児	早茶采尽晩茶出、小麦方秀大麦黄。	B	茶	麦
1191	紹熙2	病後登山亭	睡魔欺茗薄、疾豎怯丹霊。	A	茗	丹
1191	紹熙2	蔬圃	臥枝開野菊、残栫出秋茶。	A	茶	菊
1192	紹熙3	雨晴	茶映盞毫新乳上、琴横薦石細泉鳴。	A	茶	琴
1192	紹熙3	十五日雲陰凉尤甚再賦長句	磑茶落雪睡魔退、激水跳珠涼意生。	A	茶	水
1192	紹熙3	秋日郊居八首　其三	己炊蓋散真珠米、更点丁坑白雪茶。	A	茶	米
1192	紹熙3	閑居	土鐺茶七椀、瓦甑稷三升。	A	茶	稷
1192	紹熙3	午睡起消搖園中因登山麓薄暮乃帰	亳甌羞茗斧、銅洗供盥濯。	B	茗斧	盥濯
1193	紹熙4	龍鍾	幸有筆床茶竈在、孤舟更入剡溪雲。	C	茶	筆
1193	紹熙4	方池	日取供茶鼎、時来擲釣竿。	A	茶	釣
1194	紹熙5	新闢小園六首　其二	眼明身健残年足、飯軟茶甘万事忘。	AC	茶	飯
1194	紹熙5	西窓	薑宜山茗留閑啜、鼓下湖蓴喜共烹。	A	茗	蓴
1194	紹熙5	閑中	活眼硯凹宜墨色、長毫甌小聚茶香。	A	茶	墨
1194	紹熙5	秋霽	取琴理曲茶煙畔、看鶴梳翎竹影間。	A	茶	竹
1194	紹熙5	三峽歌九首　其四	錦繡楼前看売花、麝香山下摘新茶。	A	茶	花
1194	紹熙5	幽居二首　其二	園丁刈霜稲、村女売秋茶。	A	茶	稲
1194	紹熙5	懶趣	舌根茶味永、鼻観酒香清。	A	茶	酒
1195	慶元1	春耕	只要耕犁及時節、裹茶買餅去租牛。	C	茶	餅
1195	慶元1	春晩雑興六首　其一	僧分晨鉢筍、客共午甌茶。	A	茶	筍
1195	慶元1	春晩雑興六首　其二	児童葺茶舍、婦女蠶蚕官。	A	茶	蚕
1195	慶元1	春晩雑興六首　其五	草草半盂飯、悠悠一碗茶。	A	茶	飯
1195	慶元1	春晩雑興六首　其四	山茗封青箬、村酤坼赤泥。	A	茗	酤
1195	慶元1	四月旦作時立夏已十余日	争葉蚕饑鬧風雨、趁虚茶懶闘旗槍。	A	茶	蚕
1195	慶元1	倚杖	児童拾筍籜、婦女売茶芽。	A	茶	筍
1195	慶元1	梅天	軽陰昏茗色、余潤咽琴声。	A	茗	琴
1195	慶元1	山行	酒旗滴雨村場晩、茶竈炊煙野寺秋。	A	茶	酒
1195	慶元1	題庵壁二首　其一	酒惟排悶難中聖、茶却名家可作経。	A	茶	酒
1195	慶元1	睡起	洗面宮眉緑、開茶帯胯方。	A	茶	面
1196	慶元2	即事	安貧炊麦飯、省事嚼茶芽。	A	茶	麦
1196	慶元2	雪歌	扣門方擬貰鄰酒、篝火更欲尋僧茶。	B	茶	酒
1197	慶元3	雨中作三首　其一	茅屋松明照、茶鐺雪水煎。	A	茶	茅
1197	慶元3	雨中作三首　其二	茶甘留歯頰、香潤上衣裘。	A	茶	香
1197	慶元3	久雨	弄筆排孤悶、煎茶洗睡昏。	A	茶	筆
1197	慶元3	南窓	小鼎煎茶熟、幽人作夢回。	A	茶	夢
1198	慶元4	小園新晴二首　其一	臘醸拆泥留客醉、山茶落磑喚児煎。	A	茶	醸
1198	慶元4	親旧或見嘲終歳杜門戯作解嘲	続得茶経新絶筆、補成僧史可蔵山。	A	茶経	僧史
1198	慶元4	秋思四首　其三	寒澗挹泉供試墨、墮巣篝火喚煎茶。	A	茶	墨
1198	慶元4	秋賽	芳茶緑酒進雑逕、長魚大蔵高嵯峨。	BC	茶	酒
1198	慶元4	戯詠山家食品	牛乳**抨酥**瀹茗芽、蜂房分蜜漬棕花。	A	茗	棕
1199	慶元5	春晴自雲門帰三山	人売山茶先穀雨、鴉随埴祭過清明。	A	茶	祭
1199	慶元5	書喜二首　其一	眼明身健何妨老、飯白茶甘不覚貧。	AC	茶	飯
1199	慶元5	遣興四首　其二	湯嫩雪濤翻茗碗、火温香縷上衣篝。	A	茗	衣
1199	慶元5	斎中弄筆偶書示子聿	焚香細読斜川集、候火親烹顧渚茶。	A	茶	集
1199	慶元5	試茶	難従陸羽毀茶論、寧和陶潜止酒詩。	A	茶	酒
1200	慶元6	湖上作二首　其一	蘭亭之北是茶市、柯橋以西多櫓声。	B	茶	櫓
1200	慶元6	茅亭	児円点茶夢、客授養魚経。	A	茶	魚
1200	慶元6	幽居初夏四首　其二	赤脚挑残筍、蒼頭摘晩茶。	A	茶	筍
1200	慶元6	入梅	墨試小蝶看斗硯、茶分細乳玩毫杯。	A	茶	墨
1200	慶元6	五月十一日睡起	茶碗嫩湯初得乳、香篝微火未成灰。	A	茶	香
1200	慶元6	近村暮帰	僧閣煮茶同淡話、漁舟投釣卜清欽。	A	茶	釣
1200	慶元6	読蘇叔党汝州北山雑詩次其韻十首　其六	山茶試芳嫩、野果薦甘冷。	B	茶	果
1200	慶元6	開東園路北至山脚因治路傍隙地雑植花草六首　其五	藤杖有時緑石磑、風炉随処置茶杯。	A	茶	石
1200	慶元6	新泉絶句二首　其二	頭斗泉可瀹茗、就泉可洗薬。	B	茗	薬
1200	慶元6	午坐戯詠	貯薬葫蘆二寸黄、煎茶橄欖一甌香。	A	茶	薬
1200	慶元6	戯詠郷里食物示鄰曲	茗芽落磑壓北苑、薬苗入饌逾天台。	B	茗	薬
1200	慶元6	山家五首　其二	茶熟眠初起、児扶酒半醒。	A	茶	児
1200	慶元6	数日不出門偶賦三首　其一	老僧遣信分茶串、隠士敲門致酒甑。	A	茶	酒
1201	嘉泰1	初春感事二首　其二	活火静看茶鼎熟、清泉自注研池寛。	A	茶	研
1201	嘉泰1	春雨三首　其二	薬炉茶竈淡生涯、聴雨猶能惜物華。	C	茶	薬
1201	嘉泰1	戯作絶句以唐人句終之二首　其二	静対煎茶竈、閑疏洗薬泉。	A	茶	薬
1201	嘉泰1	秋晩村舍雑詠二首　其一	園丁種冬菜、鄰女売秋茶。	A	茶	菜
1201	嘉泰1	戯作野興六首　其一	充虚一簞飯、遣睡半甌茶。	A	茶	飯
1202	嘉泰2	初春雑興五首　其一	煎茶小石鼎、酌酒古銅卮。	A	茶	酒
1202	嘉泰2	初春雑興五首　其二	水長鷗初泛、山寒茗未芽。	A	茗	鷗
1202	嘉泰2	春遊	出山茶筍村墟鬧、上市蓴鱸匕筯新。	A	茶	蓴

西暦	製作年	題名	詩句	分類	対になる語	
1202	嘉泰 2	幽栖	棋局聊相対、茶炉亦自携。	A	茶	棋
1202	嘉泰 2	閑詠二首　其一	買菊穿苔種、懐茶就井煎。	A	茶	菊
1202	嘉泰 2	戯述淵明鴻漸遺事	品茶未及毀茶妙、飲酒何如止酒高。	A	茶	酒
1203	嘉泰 3	初帰雑詠七首　其五	下巖石潤揮毫後、正焙茶香落磑時。	A	茶	石
1203	嘉泰 3	初帰雑詠七首　其七	茶甘半日如新啜、墨妙移時不再磨。	A	茶	墨
1203	嘉泰 3	幽事	開士分朝飯、鄰翁喚午茶。	A	茶	飯
1203	嘉泰 3	幽居述事四首　其四	蒼爪嫩芽開露茗、紅根小把論煙蔬。	A	茗	蔬
1203	嘉泰 3	初春書懐七首　其四	嚢盛古墨靴紋皺、箬護新茶帯胯方。	A	茶	墨
1204	嘉泰 4	送子遹	睡少不関茶作祟、愁多却頼酒時澆。	A	茶	酒
1204	嘉泰 4	北窓	東皋客輸米、粲粲珠出碓。南山僧餉茶、細細雪落磑。	D	茶	米
1204	嘉泰 4	出行湖山間雑賦四首　其三	径繞茶岡北、橋連芡浦東。	A	茶	**芡**
1204	嘉泰 4	出行湖山間雑賦四首　其四	魚市樵風口、茶村穀雨前。	A	茶	魚
1204	嘉泰 4	閑遊四首　其三	清明漿美村村売、穀雨茶香院院誇。	A	茶	漿
1204	嘉泰 4	初暑	酒縁久病常辭酌、茶為前銜偶得嘗。	A	茶	酒
1204	嘉泰 4	北窓	盞分新作茗、炉撥欲残香。	A	茗	香
1204	嘉泰 4	甲子秋八月偶思出遊往往累日不能帰或遠至傍県凡得絶句十有二首雑録入稿中亦不復詮次也　其六	懐餅裹茶来問訊、不妨一笑寂寥中。	C	茶	餅
1204	嘉泰 4	飯後偶題	長橋鮓美桃花嫩、北苑茶新帯胯方。	A	茶	鮓
1204	嘉泰 4	述意	頻喚老僧同夜粥、間従鄰叟試秋茶。	A	茶	粥
1204	嘉泰 4	枕上	飯軟茶甘吾事了、但愁無酒酌公栄。	C	茶	飯
1204	嘉泰 4	寒雨中夜坐	炉爇松肪如蠟爨、鼎煎茶浪起灘声。	A	茶	松
1205	開禧 1	閉門二首　其二	数簡隠書忘世味、半甌春茗過花時。	A	茗	書
1205	開禧 1	命駕	岸幘影辺茶正熟、投壺声裏日初長。	A	茶	日
1205	開禧 1	東籬雑題五首　其一	愛客茶新碾、留僧飯別炊。	A	茶	飯
1205	開禧 1	東籬雑題五首　其二	曳杖一蕭散、待茶時欠伸。	A	茶	杖
1205	開禧 1	石帆夏日二首　其二	短棹飄然信所之、茶園漁市到無時。	C	茶	漁
1205	開禧 1	流年	唾壺塵尾已従省、茶竈筆床猶自随。	A	茶竈	唾壺
1205	開禧 1	秋近	茶醺頗妨千里夢、簟涼初怯五更風。	A	茶	簟
1205	開禧 1	閑遊三首　其一	茶竈酒壚多識面、少留売薬買漁蓑。	C	茶	酒
1205	開禧 1	遊近村二首　其一	行歴茶岡到薬園、却従釣瀨入樵村。	BC	茶	薬
1205	開禧 1	雑興二首　其二	座懸鏡古森毛髪、甌聚茶香爽歯牙。	A	茶	鏡
1205	開禧 1	幽事絶句六首　其六	日昳方炊飯、秋深始采茶。	A	茶	飯
1205	開禧 1	戯遣老懐五首　其二	尋僧竹院逢茶熟、引鶴渓橋及雪残。	A	茶	雪
1206	開禧 2	初夏閑居八首　其六	小楼有月聴吹笛、深院無風看磑茶。	A	茶	笛
1206	開禧 2	述閑	香嗟翻心字、茶凝出草書。	A	茶	香
1206	開禧 2	耒陽令曾君寄禾譜農器譜二書求詩	歐陽公譜西都花、蔡公亦記北苑茶。	B	茶	花
1206	開禧 2	庵中紀事用前輩韻	荒山斸薬須長鑱、小竈煎茶便短袂。	B	茶	薬
1206	開禧 2	秋懐十首　其五	活火閑煎茗、残枰静拾棋。	A	茗	棋
1206	開禧 2	出遊二首　其二	篝火就炊朝甑飯、汲泉自煮午甌茶。	A	茶	飯
1206	開禧 2	新寒	扶杖穿茶塢、移舟傍釣灘。	A	茶	釣
1206	開禧 2	二毀	茶杯得之久、石硯日在前。	B	茶杯	石硯
1206	開禧 2	飯後登東山	飯已茶未成、蓑裟歩山径。	C	茶	飯
1206	開禧 2	雨中示鄰里	未嘗焼茶鐺、而況把酒碗。	B	茶	酒
1207	開禧 3	題野人壁	市壚買酒何人識、僧閣煎茶欠客同。	A	茶	酒
1207	開禧 3	見事	陰陰竹塢安茶竈、浅浅蘋汀著釣船。	A	茶	釣
1207	開禧 3	羸臥	茶因春困論交密、酒為家貧作態多。	A	茶	酒
1207	開禧 3	自九里平水至雲門陶山歴龍瑞禹祠而帰凡四日八首 其七	数声茶飯斎初散、一片渓雲雨欲来。	A	茶飯	渓雲
1207	開禧 3	早至園中	旧為愛茶分水器、近縁炊爨得琴材。	A	茶	爨
1207	開禧 3	急雨	寒泉不減中濡味、貢茗初嘗正焙新。	A	茗	泉
1207	開禧 3	残春無幾述意二首　其一	試筆書盈紙、烹茶睡解囲。	A	茶	筆
1207	開禧 3	戯書燕几二首　其一	水品茶経常在手、前身疑是竟陵翁。	C	茶	水
1207	開禧 3	秋晩雑興十二首　其五	聊将横浦紅糸磑、自作蒙山紫筍茶。	A	茶	磑
1207	開禧 3	南堂雑興八首　其五	茆簷喚客家常飯、竹院随僧自在茶。	A	茶	飯
1207	開禧 3	呉歌	困睫憑茶醒、衰顔頼酒酡。	A	茶	酒
1207	開禧 3	書況	琴譜従僧借、茶経与客論。	B	茶	琴
1207	開禧 3	雪意	閑話更端茶竈熟、清詩分韻地炉紅。	A	茶	話
1208	嘉定 1	午坐	茶杯凝細乳、香岫起微雲。	A	茶	香
1208	嘉定 1	短歌示諸稚	酒蟻溢罇罍、茗雪落小磾。	B	茗	酒
1208	嘉定 1	会稽行	茶荈可作経、楊梅亦著譜。	B	茶荈	楊梅
1208	嘉定 1	与児孫同舟泛湖至西山旁憩酒家遂詠任氏茅庵而帰	酒保殷勤邀淪茗、道翁傴僂出迎門。	A	淪茗	迎門
1208	嘉定 1	又作二首自解　其一	已分鄰舎紅蓮米、更啜僧房紫筍茶。	A	茶	米
1208	嘉定 1	初夏喜事	采茶歌裏春光老、煮繭香中夏景長。	A	茶	繭
1208	嘉定 1	閑遊二首　其一	平生長物掃除尽、猶帯筆床茶竈来。	C	茶	筆
1208	嘉定 1	初夏雑興六首　其一	把釣渓頭蹋溜瀨、煎茶林下置風炉。	A	茶	釣
1208	嘉定 1	池亭夏昼二首　其一	小磑落茶紛雪片、寒泉得火作松声。	A	茶	火
1208	嘉定 1	閑詠	茶分止焙新開箬、水挹中濡自候湯。	A	茶	水
1208	嘉定 1	雨晴	孰知倦客蕭然意、水品茶経手自携。	C	茶	水
1208	嘉定 1	戯書日用事	寒添沽酒興、困喜磑茶声。	A	茶	酒
1208	嘉定 1	書壁二首　其一	留客秋茶苦、醺人社酒渾。	A	茶	酒
1208	嘉定 1	湖山九首　其六	茶煙映山起、酒簾傍堤斜。	A	茶	酒
1208	嘉定 1	幽居歳暮五首　其四	燃薪代秉燭、煮茗当伝杯。	A	茗	薪
1208	嘉定 1	過湖上僧庵	奇香炷罷雲生岫、瑞茗分成乳泛杯。	A	茗	香
1208	嘉定 1	遊山歩二首　其二	時喚行僧同煮茗、亦逢樵叟問迷途。	A	煮茗	迷途
1208	嘉定 1	微疾	林外鼓歌聞賽廟、懐中茶餅議租桑。	A	茶	鼓
1209	嘉定 2	肩輿歴湖桑堰東西過陳湾至陳讓堰小市抵暮乃帰二首　其一	野店茶香迎倦客、市街犬熟傍行人。	A	茶	犬
1209	嘉定 2	肩輿至石堰村	澗薪旋拾供茶竈、詩稿初成寄薬嚢。	A	茶	薬
1209	嘉定 2	幽居示客二首　其一	嗜睡疏茶碗、逢春愛麴車。	A	茶	麴
1209	嘉定 2	春日	山寺饋茶知穀雨、人家插柳記清明。	A	茶	柳
1209	嘉定 2	六言六首　其四	客至旋開新茗、僧帰未拾残棋。	B	茗	棋
1209	嘉定 2	暮春亀堂即事四首　其四	蚕房已裹清明種、茶戸初収穀雨芽。	A	茶	蚕
1209	嘉定 2	蘭亭道上四首　其三	蘭亭酒美逢人酔、花塢茶新満市香。	A	茶	酒
1209	嘉定 2	山行過僧庵不入	茶炉煙起知高興、棋子声疏識苦心。	A	茶	棋
1209	嘉定 2	小憩臥龍山亭	松寒詩思健、茶爽酔魂醒。	A	茶	松
1209	嘉定 2	清暑	厨人具漿粉、童子煮山茗。	B	茗	粉
1209	嘉定 2	晩興	客散茶甘留舌本、睡余書味在胸中。	A	茶	書
1209	嘉定 2	秋興四首　其四	鄰父築場収早稼、渓姑負籠売秋茶。	A	茶	稼
1209	嘉定 2	秋日遣懐八首　其八	晨几手作墨、午窓身磑茶。	B	茶	墨
1209	嘉定 2	秋雨	看書不覚向壁臥、煎茶欲罷推枕起。	B	茶	書
1209	嘉定 2	病小減復作三首　其三	晨粥半茶碗、秋衣一布裘。	A	茶	布
1209	嘉定 2	病中雑詠十首　其六	茶煎小鼎初翻浪、燈映寒窓自結花。	A	茶	燈

【陸游の茶詩の製作時期】

表5



陸游ほど名茶を飲む機会に恵まれた恵まれた詩人は無いであろう。故郷山陰近くの会稽山では、宋の草茶を代表する日鋳茶が産し、赴任先の蜀は古来、蒙頂茶など名茶の産地であった。また、晩年は福建の武夷宮を管理する名誉職として、毎年北苑茶を贈られていた。他にも、民間で売られている茶への言及も多い。その喫茶法はおそらく多様であったが、詩に詠まれる範囲では、点茶が中心だったと思われる。一方で、宋の他の詩人にくらべると、「煎茶」の語を用いることが多く、理念的には白居易に代表される唐の茶文化を継承する意識があったと推測される(注6)。その、「茶」を用いた対偶の例は、表4に示したとおりである。ABCは表1と同じ、Dは扇対の場合である。

陸游がその一生のそれぞれの時期で茶詩を製作した数は、表5に示したとおりである。これは、茶が描かれている詩の数と、茶を用いた対偶を含む詩の数を、それぞれ五年ごとにまとめて数えたものであるが、ほぼ同じ傾向を示す。すなわち、明かな右肩上がりである。ここで茶詩の製作数が増大していくきっかけは、乾道五年（一一七〇）に、蜀に赴任したことであることがあきらかである。その途上、三峡で詠んだ詩からは、三遊洞の白居易ゆかりの名水、天下第四泉たる蝦蟇培泉を訪ねた歓びが読み取れる。その後の蜀における滞在時期（1170～1178）は、一つのピークをなしている。もう一つの小さなピークは、慶元五年（1199）に致仕する以前、実質的に山陰に隠居を始めた頃である。致仕の後も故郷に居て詩作を続け、没するまで茶詩の作製は続き、最大のピークは晩年にあるという結果になっている。全体として、故郷での隠棲生活こそが、彼の茶の精神にもっともかなったものであったのだろう(注7)。

【酒との対について】

「茶」と「酒」との対偶関係は、白居易の詩においても極めて重要であった。白居易が「茶」と「酒」を、日常的に愛飲する飲料として、自然に詠んでいたことは、上述したとおりである。これに対して、陸游が「茶」と「酒」を対にする場合も、やはり最多であって三十例にも上るが、数が多いだけに、単純に説明することはできない。ただ、注目すべきなのは、彼が「茶」と「酒」を対にした最初の例、つまり「睡」の「凍醪有力勤推挽、春茗無端苦破除」は、比較的晩年、すでに官を辞して隠居していた淳熙八年に下るということである。したがって、彼の用いた「茶」と「酒」との対偶表現は、それなりに成熟した時期のものとして、重視すべきということである。

「茶」と「酒」の対偶は、内容から見ていくつかの類型に分けられると思われる。まず第一に、白居易のケースと最も近いものとして、日常生活で「茶」と「酒」のそれぞれの良さを認識しつつ、愛飲するという方向のものがある。「睡」の「凍醪有力勤推挽、春茗無端苦破除（凍醪は力有りて推挽に勤め、春茗は端無く破除に苦しむ）」、「題斎壁四首　其二」の「甘寝毎憎茶作祟、清狂直以酒為仙（寝を甘しとして毎に憎む茶の祟を作すを、清狂にして直だ酒を以て仙と為す）」、「懶趣」の「舌根茶味永、鼻観酒香清（舌根に茶味永く、鼻観に酒香清し）」、「送子遹」の「睡少不関茶作祟、愁多却頼酒時澆（睡り少くなきは茶の祟を作すに関せず、愁い多くして却りて頼る酒の時に澆ぐに）」、「初暑」の「酒縁久病常辞酌、茶為前銜偶得嘗（酒は久病に縁りて常に酌を辞し、茶は前銜の為に偶ま嘗むるを得）」、「雨中示鄰里」の「未嘗焼茶鐺、而況把酒碗（未だ嘗て茶鐺を焼ず、而して況んや酒碗を把るをや）」、「羸臥」の「茶因春困論交密、酒為家貧作態多（茶は春困に因りて交を論ずること密、酒は家貧の為に態を作すこと多し）」、「呉歌」の「困睫憑茶醒、衰顔頼酒酡（困睫は茶に憑りて醒め、衰顔は酒に頼りて酡し）」、「幽居示客二首　其一」の「嗜睡疏茶碗、逢春愛麴車（睡を嗜みて茶碗を疏み、春に逢いて麴車を愛す）」である。とりわけ、「睡」との関わりで「茶」を詠むのは、白居易の影響に違いなく、「睡少不関茶作祟、

愁多却頼酒時澆」などは、白居易の「駆愁知酒力、破睡見茶功」へのオマージュであるといえる。

これに対し、第二の類型として、茶を自らの生活に属するものとして描くのでなく、外部にある寺院・僧侶に属するものとして描く場合が、相当数存在する。「雲門過何山」の「思酒過野店、念茶叩僧扉（酒を思いて野店に過り、茶を念いて僧扉を叩く）」、「山行」の「酒旗滴雨村場晩、茶竈炊煙野寺秋（酒旗は雨を滴らす村場の晩、茶竈は煙を炊ぐ野寺の秋）」、「雪歌」の「扣門方擬貰鄰酒、篝火更欲尋僧茶（門を扣きて方に鄰酒を貰りんと擬す、火を篝して更に僧茶を尋ねんと欲す）」、「数日不出門偶賦三首　其一」の「老僧遣信分茶串、隠士敲門致酒瓿（老僧は信を遣りて茶串を分かち、隠士は門を敲きて酒瓿を致す）」、「閑遊四首　其三」の「清明漿美村村売、穀雨茶香院院誇（清明の漿美しくして村村に売り、穀雨の茶香りて院院に誇る）」、「題野人壁」の「市墟買酒何人識、僧閣煎茶欠客同（市墟に酒を買いて何人か識る、僧閣に茶を煎て客の同にするを欠く）」である。ここでは、寺院で飲まれたり、（おそらく生産されて）僧よりもたらされる「茶」と対比させられているのは、「野店」「酒旗」「市墟（市場の意）」に示される、村の市販の酒であり、場合によっては近隣の知人や隠士によってもたらされる酒である。このような「茶」と「酒」は、故郷の社会の諸階層に対する愛着を、広く述べるための道具として機能している。

また、第三の類型として、過去の茶文化を濃密に意識した上で、「茶」と「酒」の対偶を構成する場合が挙げられよう。それは、「雪夜作」の「龍茶与羔酒、得失不足評（龍茶と羔酒と、得失は評するに足りず）」、「題庵壁二首　其一」の「酒惟排悶難中聖、茶却名家可作経（酒は惟れ悶を排して聖に中り難く、茶は却りて家に名づけて経を作るべし）」、「試茶」の「難従陸羽毀茶論、寧和陶潜止酒詩（陸羽の毀茶の論には従い難く、寧ろ陶潜の止酒の詩に和す）」、「戯述淵明鴻漸遺事」の「品茶未及毀茶妙、飲酒何如止酒高（茶を品するは未だ茶を毀つの妙なるに及ばず、酒を飲むは何ぞ酒を止むるの高なるに如かんや）」などで、「落磑」のような単なる典故表現ではなく、茶文化そのものを詠み込んでいるといって過言ではない（注8）。

第四に、民間の茶と酒を詠んだ場合がある。「閑遊三首　其一」の「茶竈酒壚多識面、少留売薬買漁蓑（茶竈と酒壚は多く面を識り、少く留まりて薬を売りて漁蓑を買う）」、「湖山九首　其六」の「茶煙映山起、酒簾傍堤斜（茶煙は山に映えて起き、酒簾は堤に傍いて斜めなり）」、「蘭亭道上四首　其三」の「蘭亭酒美逢人醉、花塢茶新満市香（蘭亭は酒美にして人に逢えば醉い、花塢は茶新しくして市に満ちて香る）」では、故郷の町中で茶や酒が売られている場面を絵画的に詠み、ある意味で第一の類と似た性格を持つ。

それ以外の例は、必ずしも一類型としてまとめられるものではないが、陸游自身が飲む「茶」と「酒」を多様な角度から詠んでいる。「題徐淵子環碧亭亭有茶山曾先生詩」の「速宜力置竹葉酒、不用更瀹桃花茶（速かに宜しく力めて竹葉酒を置くべく、更に桃花茶を瀹するを用いず）」、「春晩雑興六首　其四」の「山茗封青箬、村酤坼赤泥（山茗は青箬に封じ、村酤は赤泥を坼く）」、「小園新晴二首　其一」の「臘醸拆泥留客醉、山茶落磑喚児煎（臘醸は泥を拆きて客を留めて醉い、山茶は磑より落ちて児を喚びて煎しむ）」、「初春雑興五首　其一」の「煎茶小石鼎、酌酒古銅卮（茶を小さき石鼎に煎じ、酒を古き銅卮に酌む）」、「短歌示諸稚」の「酒蟻溢皤罌、茗雪落小礸（酒蟻は皤罌に溢れ、茗雪は小礸より落つ）」、「戯書日用事」の「寒添沽酒興、困喜磑茶声（寒くして酒を沽う興を添え、困じて茶を磑く声を喜ぶ）」、「書壁二首　其一」の「留客秋茶苦、醺人社酒渾（客を留めて秋茶苦く、人を醺わせて社酒渾る）」が挙げられる。ここで述べられる「山茗」「山茶」「秋茶」は、近隣の山で生産され、市販されている茶を指し、日鋳茶の如き名茶を大げさに詠むのとは、異なった雰囲気の表現であるである。

以上を通じて確認できるのは、陸游が白居易を継承しながら、茶の表現の巾を広げ、個人の生活だけでなく、周辺の自然・社会のさまざまな局面において、「茶」に意味を持たせているということである。それが、最も一般的な飲料を表わす「酒」との対比に明瞭に現れているのである。

【飯との対について】

「酒」に次いで多く見られる、「飯」との対偶には、次のようなものがある。これらは、晩年に近い紹熙五年以下のものである。「新闢小園六首　其二」の「眼明身健残年足、飯軟茶甘万事忘（眼明らかに身健なれば残年足り、飯軟かく茶甘ければ万事忘る）」、「春晩雑興六首　其五」の「草草半盂飯、悠悠一碗茶（草草たる半盂の飯、悠悠たる一碗の茶）」、「書喜二首　其一」の「眼明身健何妨老、

飯白茶甘不覚貧（眼明らかに身健なれば何ぞ老いるを妨げん、飯白く茶甘ければ貧しきを覚えず）」、「戯作野興六首　其一」の「充虚一簞飯、遣睡半甌茶（虚を充たすは一簞の飯、睡を遣るは半甌の茶）」、「幽事」の「開士分朝飯、鄰翁喚午茶（開士は朝飯を分かち、鄰翁は午茶を喚ぶ）」、「枕上」の「飯軟茶甘吾事了、但愁無酒酌公栄（飯軟く茶甘ければ吾事了れり、但だ愁う酒の公栄に酌する無きを）」、「東籬雑題五首　其一」の「愛客茶新碾、留僧飯別炊（客を愛して茶を新たに碾き、僧を留めて飯を別に炊く）」、「幽事絶句六首　其六」の「日昳方炊飯、秋深始采茶（日昳（かたむ）きて方めて飯を炊き、秋深くして始めて茶を采る）」、「出遊二首　其二」の「篝火就炊朝甑飯、汲泉自煮午甌茶（火を篝（た）きて就ち炊く朝甑の飯、泉を汲みて自ら煮る午甌の茶）」、「飯後登東山」の「飯已茶未成、褰裳歩山径（飯已みて茶未だ成らず、裳を褰げて山径を歩く）」、「南堂雑興八首　其五」の「茆簷喚客家常飯、竹院随僧自在茶（茆簷に客を喚ぶ家常の飯、竹院に僧に随う自在の茶）」がその例であり、晩年の穏やかな日常を「茶」と「飯」に象徴させているものが多い。その発想自体、白居易の茶詩の影響が強いこと、特に「草草半盂飯、悠悠一碗茶」「充虚一簞飯、遣睡半甌茶」に明かである。ただ、白居易では「粥」というところを、陸游では「飯」と言い換えている感がある。なお、白居易には「茶」と「飯」の対が二例見られる。

また、「飯」と意味の近い「米」も、「茶」と対にされる。「又作二首自解其一」の「已分鄰舎紅蓮米、更啜僧房紫筍茶（已に分つ鄰舎の紅蓮の米、更に啜る僧房の紫筍の茶）」、「幽居二首　其一」の「得飽罷揮求米帖、愛眠新著毀茶文（飽くを得て揮うを罷む求米の帖、眠を愛して新たに著わす毀茶の文）」、「秋日郊居八首　其三」の「已炊藹散真珠米、更点丁坑白雪茶（已に炊く藹散たる真珠米、更に点ず丁坑の白雪茶）」、「北窓」の「東皋客輸米、粲粲珠出碓。南山僧餉茶、細細雪落磑（東皋の客米を輸し、粲粲として珠碓より出づ。南山の僧茶を餉り、細細として雪磑より落つ）」などがそれで、その発想自体は「茶」「飯」の対と近いが、「米」の場合は、見た目の美を描く傾向が見て取れる。

【香との対について】

「茶」と「香」が対にされる例は、「題徐子礼宗丞自覚斎」の「茶熟松風生石鼎、香残雲縷遶蒲団（茶は熟えて松風石鼎に生じ、香は残りて雲縷蒲団を遶る）」、「西斎雨後」の「香碗灰深微炷火、茶鐺声細緩煎湯（香碗に灰深くして微かに火を炷（とも）し、茶鐺に声細くして緩かに湯を煎る）」、「独坐」の「茶鼎松風吹謖謖、香奩雲縷散鄰鄰（茶鼎の松風は吹くこと謖謖として、香奩の雲縷は散ること鄰鄰たり）」、「慈雲院東閣小憩」の「香濃煙穂直、茶嫩乳花円（香は濃くして煙穂は直、茶は嫩くして乳花は円し）」、「午寝」の「灰冷香煙無復在、湯成茶椀径須持（灰は冷えて香煙は復た在ること無く、湯は成りて茶椀は径（ただ）ちに須らく持つべし）」、「道室夜意」の「茶鼎声号蚓、香盤火度螢（茶鼎の声は号（さけ）ぶ蚓、香盤の火は度る螢）」、「飯罷忽鄰父来過戯作」の「茶味森森留歯頰、香煙鄰鄰著図書（茶味は森森として歯頰に留まり、香煙は鄰鄰として図書に著く）」、「雨中作三首　其二」の「茶甘留歯頰、香潤上衣裘（茶は甘くして歯頰に留まり、香は潤いて衣裘に上る）」、「五月十一日睡起」の「茶碗嫩湯初得乳、香篝微火未成灰（茶碗の嫩湯は初めて乳を得、香篝の微火は未だ灰と成らず）」、「北窓」の「盞分新作茗、炉撥欲残香（盞は分つ新たに作れる茗、炉は撥す残らんと欲するの香）」、「述閑」の「香暖翻心字、茶凝出草書（香暖くして心字を翻し、茶凝りて草書を出だす）」、「午坐」の「茶杯凝細乳、香岫起微雲（茶杯に細乳を凝らし、香岫より微雲を起こす）」、「過湖上僧庵」の「奇香炷罷雲生岫、瑞茗分成乳泛杯（奇香炷し罷（おわ）りて雲岫に生じ、瑞茗分ち成りて乳杯に泛ぶ）」である。

これらの例は、「徐子礼宗丞自覚斎」を除いて陸游自身の居室の様子を詠んだものである。文人が静かに過ごす空間の雰囲気を構成する素材として、「茶」と「香」が使用されているのであり、香の灰の様子や、煙の様子といった視覚的な面が生かされている。対する「茶」は、聴覚、味覚、視覚などのそれぞれの美が、多様に使われている。「茶」の詩語としての使い勝手のよさが生かされているというべきであろう。なお、「茶」と「香」の対偶は、唐詩には三例と少ない。

【薬との対について】

「茶」と「薬」の対偶も多く、「過林黄中食柑子有感学宛陵先生体」の「薬分臘剤香、茶泛春芽白（薬は分ちて臘剤香り、茶は泛びて春芽白し）」、「簡黎道士」の「道人昔是茶山客、病叟新為薬市遊（道人は昔是れ茶山の客、病叟は新たに薬市の遊と為る）」、「遊法雲寺観彝老新葺小園」の「竹筧引泉滋薬壟、風炉篝火試茶杯（竹筧もて泉を引きて薬壟を滋し、風炉に火を篝（た）きて茶杯を試む）」、「新

泉絶句二首　其二」の「蘇爆泉可瀹茗、就泉可洗薬（泉を蘇みては茗を瀹すべく、泉に就きては薬を洗うべし）」、「午坐戲詠」の「貯薬葫蘆二寸黄、煎茶橄欖一甌香（薬を貯うる葫蘆は二寸の黄、茶を煎る橄欖は一甌の香）」、「戲詠郷里食物示鄰曲」の「茗芽落磑圧北苑、薬苗入饌逾天台（茗芽磑より落ちて北苑を圧し、薬苗饌に入りて天台に逾ゆ）」、「春雨三首　其二」の「薬炉茶竈淡生涯、聴雨猶能惜物華（薬炉と茶竈と淡き生涯、雨を聴きて猶お能く物華を惜しむ）」、「戲作絶句以唐人句終之二首　其二」の「静対煎茶竈、閑疏洗薬泉（静かに茶を煎る竈に対し、閑かに薬を洗う泉を疏す）」、「遊近村二首　其一」の「行歴茶岡到薬園、却従釣瀬入樵村（行く茶岡を歴て薬園に到り、却きて釣瀬より樵村に入る）」、「庵中紀事用前輩韻」の「荒山斸薬須長鑱、小竈煎茶便短袂（荒山に薬を斸るは長鑱を須い、小竈に茶を煎るは短袂を便とす）」、「肩輿至石堰村」の「澗薪旋拾供茶竈、詩稿初成寄薬囊（澗薪は旋ち拾いて茶竈に供し、詩稿は初めて成りて薬囊に寄す）」の十一例が見られ、これに「病後登山亭」の「睡魔欺茗薄、疾豎怯丹霊（睡魔は茗の薄きに欺かれ、疾豎は丹の霊なるを怯ゆ）」を加えると十二例となる。

「茶」と「薬」の対偶関係は、上述のように、唐詩の世界ですでに一般的なものとなっており、白居易も好んで用いている。ただ、陸游の茶詩における「薬」は、薬を栽培する場所の「薬壟」「薬園」「薬苗」、薬の容器の「貯薬葫蘆」「薬囊」のような形、もしくは薬の栽培、収穫の様子「洗薬」「斸薬」を詠むものの、薬の服用と喫茶を対にすることは少ない。この点は、薬を挽く香りや音を詠み込んだ白居易とは異なっている。書斎の中に薬の香りが漂っていると詠むのは、「薬分臘剤香、茶泛春芽白」のみであり、これは他人の家を訪れた時の描写である。後に述べるように、陸游は「香」「琴」「棋」「書」「墨」等いかにも文人趣味的なものを、「茶」と対にして、書斎の雰囲気を構成する語として用いている。「薬」は、そこに加わらないと見られる。

【墨との対について】

「茶」と「墨」を対にしているのが、「幽事」の「快日明窓閑試墨、寒泉古鼎自煎茶（快日明窓に閑かに墨を試み、寒泉古鼎に自ら茶を煎る）」、「初夏燕堂睡起」の「晨几硯凹涵墨色、午窓杯面聚茶香（晨几の硯凹に墨色を涵み、午窓の杯面に茶香を聚む）」、「初寒在告有感三首　其一」の「銀毫地緑茶膏嫩、玉斗糸紅墨瀋寛（銀毫の地は緑にして茶膏は嫩く、玉斗の糸は紅にして墨瀋は寛し）」、「閑中」の「活眼硯凹宜墨色、長毫甌小聚茶香（活眼の硯凹みて墨色に宜しく、長毫の甌小くして茶香を聚む）」、「秋思四首　其三」の「寒澗挹泉供試墨、堕巣篝火喚煎茶（寒澗に泉を挹みて墨を試むに供し、堕巣もて火を篝りて茶を煎しむ）」、「入梅」の「墨試小螺看斗硯、茶分細乳玩毫杯（墨は小螺を試みて斗硯を看、茶は細乳を分かちて毫杯を玩ぶ）」、「初帰雑詠七首　其七」の「茶甘半日如新啜、墨妙移時不再磨（茶は甘くして半日新たに啜るが如く、墨は妙にして時を移して再び磨らず）」、「初春書懐七首　其四」の「嚢盛古墨靴紋皺、箬護新茶帯胯方（嚢は古墨を盛りて靴紋の皺あり、箬は新茶を護りて帯胯方なり）」、「秋日遣懐八首　其八」の「晨几手作墨、午窓身磑茶（晨几に手ら墨を作り、午窓に身ら茶を磑く）」の九例、「研（すずり）」を対にしているのが一例、「初春感事二首　其二」の「活火静看茶鼎熟、清泉自注研池寛（活火を静かに看て茶鼎熟え、清泉自ら注ぎて研池寛し）」であり、実質は「墨」と同じである。これらの詩は数多いものの、ほぼ同じ情景、つまり作者が書斎（「晨几手作墨、午窓身磑茶」という句は、「明窓浄机」という語を連想させる）で閑居の時を過ごす際に、一方では硯で墨を磨り、一方では茶を味わうということである。

宋代において、墨と茶が対比されるのは、よく知られた事実である(注9)。「嚢盛古墨靴紋皺、箬護新茶帯胯方」は、茶と墨の形状をならべて描いている。墨や硯は鑑賞すべき芸術品として描かれ、「寒澗挹泉」や「清泉自注」などの表現は、茶についての水の記述にも使えそうなものである。とはいえ宋代においては、茶を書斎で直接にいれるということはあまりなかったと思われ、茶器まで文房具化していることはなかっただろう。

なお、唐詩にも、「茶」と「墨」を対にする例はある。賈島「原東居喜唐温琪頻至」の「墨研秋日雨、茶試老僧鐺（墨は秋日の雨を研り、茶は老僧の鐺に試む）」など四例あるが、いずれも五言における単純な対で、陸游ほど「墨と茶」に思い入れがある表現ではない。蘇軾や黄庭堅も、「茶」と「墨」を対偶としておらず、これは、陸游の独自性を示すものといえよう。

【水との対について】

「茶」と「水」を対にするのが、「卜居二首　其二」の「雪山水作中泠味、蒙

頂茶如正焙香（雪山の水は中冷の味を作し、蒙頂の茶は正焙の香りの如し）」、「十五日雲陰涼尤甚再賦長句」の「磑茶落雪睡魔退、激水跳珠涼意生（茶を磑けば雪を落して睡魔退き、水を激すれば珠を跳ねて涼意生ず）」、「戲書燕几二首　其一」の「水品茶経常在手、前身疑是竟陵翁（水品茶経は常に手に在り、前身は疑うらくは是れ竟陵翁ならん）」、「閑詠」の「茶分正焙新開箬、水挹中濡自候湯（茶は正焙を分ちて新たに箬を開き、水は中濡を挹（く）みて自ら湯を候（み）る）」、「雨晴」の「孰知倦客蕭然意、水品茶経手自携（孰か知らん倦客の蕭然の意を、水品と茶経と手ら自ら携う）」の五例、「茶」と「泉」を対にするのが、「晨雨」の「青蒻雲腴開鬪茗、翠甍玉液取寒泉（青蒻の雲腴は鬪茗を開き、翠甍の玉液は寒泉を取る）」「急雨」の「寒泉不減中濡味、貢茗初嘗正焙新（寒泉は中濡の味に減ぜず、貢茗初て嘗めて正焙新たなり）」の二例である。

これらの詩句では、『茶経』と、『水品』（『煎茶水記』のこと）を並挙し、その『水品』で天下第一とされる「揚子江中濡水（中冷水）」に、しばしば言及しており、唐代に完成した、水を重視する煎茶文化を意識していることは言をまたない。それ以外にも、「蒙頂茶」（唐代以来詩に詠われる名茶）、「磑茶落雪」（「黄庭堅の詩「双井茶送子瞻」の「我家江南摘雲腴、落磑霏霏雪不如（我家は江南に雲腴を摘み、磑より落つること霏霏として雪も如かず）」を踏まえる）、「竟陵翁」（陸羽の号）、「正焙」（北苑の製茶場のこと）など、唐宋の典故や専門語を踏まえた表現が目立つ。

【釣との対について】

「茶」と「釣」の対としては、「夏日湖上」の「茶竈遠従林下見、釣筒常向月中収（茶竈は遠く林下に見、釣筒は常に月中に収む）」、「方池」の「日取供茶鼎、時来擲釣竿（日に取りて茶鼎に供し、時に来りて釣竿を擲つ）」、「近村暮帰」の「僧閣煮茶同淡話、漁舟投釣卜清歓（僧閣に茶を煮て淡話を同にし、漁舟に釣を投じて清歓を卜う）」、「新寒」の「扶杖穿茶塢、移舟傍釣灘（杖に扶けられて茶塢を穿ち、舟を移して釣灘に傍う）」、「見事」の「陰陰竹塢安茶竈、浅浅蘋汀著釣船（陰陰たる竹塢に茶竈を安（お）き、浅浅たる蘋汀に釣船を著く）」、「初夏雑興六首　其一」の「把釣渓頭蹋湍瀬、煎茶林下置風炉（釣を把りて渓頭に湍瀬を蹋み、茶を煎て林下に風炉を置く）」の六例がある。

これらの多くは晩年山陰に隠居して、家の近隣を散策する場面を描く。「茶」が対で描かれるのは、「茶竈」や「風炉」を携帯して、外で茶を煮て飲むからである。釣という行為は、富春江で釣をした厳光を代表として、隠者のなすべきことであるし、漁礁はもともと隠者の代名詞のようなものである。したがって、「釣」を詠む唐詩は大量に上る。特に「漁具」を好んで詩に詠んだのは、皮日休と陸亀蒙である、この皮日休が、その「褚家林亭」において、「蕭疎桂影移茶具、狼籍蘋花上釣筒（蕭疎たる桂影に茶具を移し、狼籍たる蘋花に釣筒を上す）」と詠み、「茶」と「釣」を対にするのも注目されるところである。なお、蘇軾、黄堅庭が、「茶」と「釣」を対にした例は無い。

【書との対について】

「茶」と「書」の対偶は四例見られる。「晩興」の「客散茶甘留舌本、睡余書味在胸中（客は散りて茶は甘く舌本に留まり、睡余の書味は胸中に在り）」、「秋雨」の「看書不覚向壁臥、煎茶欲罷推枕起（書を看て覚えず壁に向いて臥し、茶を煎て罷めんと欲し枕を推して起く）」、「喜晴」の「開書頓失昏花墜、試茗初看白乳新（書を開きて頓かに失す昏花の墜つるを、茗を試みて初めて看る白乳の新たなるを）」、「閉門二首　其二」の「数簡隠書忘世味、半甌春茗過花時（数簡の隠書に世味を忘れ、半甌の春茗に花時を過ごす）」であり、「香」との対で挙げた「茶味森森留歯頰、香煙鬱鬱著図書」も、実質的には喫茶と読書を対にしているものである。

これらの「書」は、多くの場合、書斎で味読している書物を指す。「斎中弄筆偶書示子聿」の「焚香細読斜川集、候火親烹顧渚茶（香を焚きて細く斜川集を読み、火を候て親しく顧渚茶を烹る）」、および「擁炉」の「鳧鼎煎茶非俗物、雁燈開巻愜幽情（鳧鼎に茶を煎るは俗物に非ず、雁燈に巻を開きて幽情に愜う）」も、実質的には「茶」と「書」の対と解しうる。これを合わせて、「茶」と「書」の対は七例にのぼる。

【蚕との対について】

「蚕」もしくは「繭」と、「茶」を対にしたのは、「暮春亀堂即事四首　其四」の「蚕房已裹清明種、茶戸初収穀雨芽（蚕房は已に裹む清明の種、茶戸は初めて収む穀雨の芽）」、「自上竈過陶山」の「蚕家忌客門門閉、茶戸供官処処忙（蚕家は客を忌みて門門閉じ、茶戸は官に供して処処忙し）」、「春晩雑興六首　其二」の「児童葺茶舎、婦女賽蚕官（児童は茶舎を葺き、婦女は蚕官を賽（まつ）る）」、「初

夏喜事」の「采茶歌裏春光老、煮繭香中夏景長（茶を采る歌の裏に春光は老い、繭を煮る香りの中に夏景は長し）」、「四月旦作時立夏已十余日」の「争葉蚕饑鬧風雨、趁虚茶懶闘旗槍（葉を争い蚕は饑えて風雨を鬧がし、虚に趁い茶は懶くして旗槍を闘わす）」の五例である。

養蚕業は古くより重視されていたため、詩に詠まれることは多い。ただ、茶をそれと対にするという発想には、養蚕の盛んな浙江の農村生活を、親しみを込めて詠んだところに、陸游の独自性が感じられる。ここで詠まれる「茶」は、最後の例を除いて茶の生産の情景である。「争葉蚕饑鬧風雨、趁虚茶懶闘旗槍」のみが、蚕が桑を喰う音を聞きながら、閑雅な茶を啜るというユニークな表現となっている。

【筆との対について】

「茶」と「筆」の対としては、「泛湖」の「筆床茶竈釣魚竿、瀲瀲平湖淡淡山（筆床茶竈釣魚の竿、瀲瀲たる平湖淡淡たる山）」、「龍鍾」の「幸有筆床茶竈在、孤舟更入剡溪雲（幸いに筆床と茶竈の在る有りて、孤舟にて更に入る剡溪の雲）」、「久雨」の「弄筆排孤悶、煎茶洗睡昏（筆を弄びて孤悶を排し、茶を煎て睡昏を洗う）」、「残春無幾述意二首　其一」の「試筆書盈紙、烹茶睡解囲（筆を試みては書紙に盈ち、茶を烹ては睡囲みを解く）」、「閑遊二首　其一」の「平生長物掃除尽、猶帯筆床茶竈来（平生の長物は掃除し尽すも、猶お筆床と茶竈を帯し来る）」の五例がある。

これらの表現は、書斎で文字を書き、茶を味わう心境を述べているが、「茶竈」と「筆床」を対にする場合は、戸外に遊んで、茶を飲み、文字を書くことを述べているようである。

【琴との対について】

「茶」と「琴」との対は、「閑居書事」の「玩易焚香消永日、聴琴煮茗送残春（易を玩び香を焚きて永日を消し、琴を聴き茗を煮て残春を送る）」、「到家旬余意味甚適戯書」の「石鼎颼颼閑煮茗、玉徽零落自修琴（石鼎颼颼として閑かに茗を煮、玉徽零落して自ら琴を修む）」、「雨晴」の「茶映盞毫映新乳上、琴横薦石細泉鳴（茶は盞毫に映えて新乳上り、琴は薦石に横えて細泉鳴る）」、「梅天」の「軽陰昏茗色、余潤咽琴声（軽陰茗色を昏くし、余潤琴声を咽らす）」、「書況」の「琴譜従僧借、茶経与客論（琴譜は僧より借り、茶経は客と論ず）」、の五例で、「秋霽」の「取琴理曲茶煙畔、看鶴梳翎竹影間（琴を取りて曲を理む茶煙の畔、鶴を看て翎を梳う竹影の間）」でも琴と茶が一つの詩境を構成している。いずれも隠棲における書斎や戸外での楽しみを述べている。琴がこのようなイメージで用いられることは、異とするに足りず、唐詩では四例、白居易に一例、「茶」と「琴」の対偶が見える。

【棋との対について】

「茶」と「棋」との対は、「六言六首　其四」の「客至旋開新茗、僧帰未拾残棋（客至りて旋ち新茗を開き、僧帰りて未だ残棋を拾わず）」、「山行過僧庵不入」の「茶炉煙起知高興、棋子声疏識苦心（茶炉の煙起きて高興を知り、棋子の声疏にして苦心を識る）」、「晩晴至索笑亭」の「堂空響棋子、盞小聚茶香（堂空にして棋子を響かせ、盞小にして茶香を聚む）」、「幽栖」の「棋局聊相対、茶炉亦自携（棋局は聊か相い対し、茶炉は亦た自ら携う）」、「秋懐十首　其五」の「活火閑煎茗、残杯静拾棋（活火もて閑かに茗を煎、残杯に静かに棋を拾う）」の五例である。「客至旋開新茗、僧帰未拾残棋」から容易に想像できるように、作者が交遊関係のある士人や僧侶と囲碁を楽しむことが多かったのであろう。紹興二十七年の作「酬妙湛閣梨見贈妙湛能棋其師璘公蓋嘗与先君遊云」には、土地の僧侶妙湛と、碁を打ち、茶をともにしたことを述べている。「棋」が前項の「琴」と並んで、古来、文人・隠者の高雅な趣味とされていたことは、論ずるまでもないであろう。

【白居易との比較】

陸游の茶詩における「茶」の対偶を、白居易の場合と比較してみよう。表の6と7に示したように、白居易が「茶」と対にした語は、全体として陸游のそれと大差が無い。陸游が唐詩の伝統、特に茶文化については白居易の煎茶文化の伝統を、継承したことによるものであるし、陸游の茶詩の製作が、蜀への途上、峡州の三遊洞を訪ねたことをきっかけに盛んになっていくことは、その象徴である。彼の「睡起書触目」の句「午窓初睡起、幽興付茶甌」などは、まさに白居易の詩境を理解して詠まれたものであり、単なる模倣とは思えない。

白居易と陸游の類似点は、比重の大きい「酒」と「薬」に現れている。たしかに、白居易の茶詩で重きを置かれていた「詩」は、陸游では極めて少なく、「歳晩懐故人」の「客抱琴来聯瀹茗、吏封印去又哦詩」一例のみであるが、陸游に

表6　白居易の茶詩における対

酒（榼）	12
詩（句・吟）	6
薬	6
竹	3
水・泉	2
粥・糜	2
睡	2
花	2
その他	14
計	49

表7　陸游の茶詩における対

酒（酤・醪・漿・麹）	30
飯（米・粥）	15
香	13
薬（丹）	12
墨	10
水（泉）	7
釣	6
蚕（繭）	6
書（巻・集）	6
筆	5
琴	5
棋	5
麦	4
筍	3
菊	3
松	3
その他	97
計	224

朗詠を思わせる「詩」のような表現が少ないだけであって、そのかわりに、読書を意味する「書」が目立っている。朗詠であれ、読書であれ、「茶」と詩文と対にする発想自体は受け継がれている。煎茶文化で重視される「水・泉」と「茶」を対にする点も、ともに共通している。

また、白居易の場合に「茶」との対で二回使われている「竹」「花」「粥・糜」「睡」は、陸游ではそれぞれ二回、二回、一回使われているが、「睡」だけは見当たらない。逆に、白居易が二回だけ用いている「飯」を、陸游は十五回も多用している。ただ、「飯」については、「粥・糜」に代わるものとして、つまり茶の日常性を示すものとして理解できるかもしれない。このような微細な差はあるものの、全体として、陸游は、白居易のイメージした茶の世界を継承しているといえよう。

その上で、陸游が新たに付け加えた部分があることは重視しなければならない。陸游が三回以上使用している「香」「墨」「釣」「蚕・繭」「筆」「棋」「麦」「筍」「菊」「松」は、白居易においては「茶」と対にされない言葉である。陸游が五回使用した「琴」のみ、白居易は「琴茶」というそのものの題の詩で「琴裏知聞唯渌水、茶中故旧是蒙山」と、一度だけ用いているが。

これら付け加えられた部分は、陸游が新しく打ち立てた茶のイメージを表し、同時に南宋期の茶文化の特質を示すものであろう。特に際立っているのは、「墨」「筆」「棋」「琴」など、いわゆる琴棋書画として括られる「文雅な遊芸（注10）」、またそれと関わりの深い文房趣味に属する言葉が、「茶」と対にされていることである。宋代から盛んになる文房趣味が、茶と融合した様子がうかがえる。

第二に、「蚕・繭」「麦」「筍」は、白居易が使用しなかっただけでなく、唐詩全体でも少ないもので、これらを「茶」と対にしたのは、故郷の田園生活を愛した陸游独自の感覚である。もとより、それは広い意味での隠逸趣味と結びつくので、全く斬新なものというわけではない。

まとめ

最後に、白居易と陸游の茶文化の違いについて、茶詩の対偶から見て取れることを、あらためてまとめてみたい。

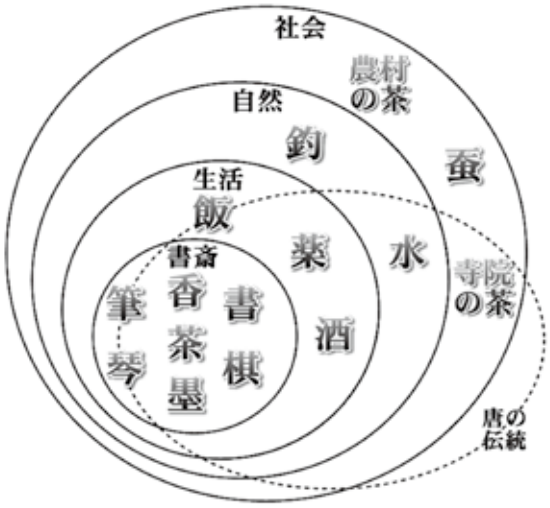


図2

白居易は、盛唐から詩に詠まれ始めた新しい文化であるところの「茶」を、伝統的な「詩」や「酒」や「薬」に伍すものとして詩に取り入れ、実際の生活でも「茶」を欠かせないものとして愛飲した。また、「粥」「睡」と「茶」と対にしたことは、図1に示したが、その閑適生活の中でも、室内の日常に「茶」を閉じ込めがちだということが

わかる。

陸游は、基本的には、白居易の茶のイメージを引き継いでおり、隠逸時期の詩に詠まれた生活感覚は、甚だ白居易に類似している。実際、「茶」を「酒」と「薬」と対にすることは多い。ただ、陸游の場合は、喫茶の空間が書斎にとどまらず、図2に示すように、同心円的に広がっていることが特徴である。まず、書斎については、「茶」と「書」「墨」「筆」「棋」と対にする場合がそれに対応する。このような書斎の重視を前提としながらも、「飯」との対は、日常生活の場で、「釣」「筆（筆架の場合）」との対は、近隣の自然で、それぞれ茶を愛飲する様子を描く。さらに陸游は、自らが飲む茶だけでなく、故郷の社会の描写にも茶を用いている。「蚕・繭」との対は、故郷の田園を季節感とともに詠む際に用いられているし、「茶」が「酒」と対になる場合、僧寺と結びつけられることが多いのは、「茶」の社会における文化的位相を示している。もとよりこれらの特徴は、茶の生産と喫茶が盛んな浙江という地域性も関係していよう。

以上は、二人の個性的な大詩人の茶を比較したものに過ぎないが、それぞれ、煎茶文化が誕生したばかりの唐と、茶文化が熟成し複雑化した宋の、それぞれの特質を反映している。この陸游の茶のイメージは、文房趣味や名水との関係から見ても、明代に江南を中心に確立する「煎茶文化」の、土台を築くものと見てよいのだろう。

冒頭に述べたように、詩の対偶表現は、茶文化の体系を探る手がかりにすぎず、これを土台として、より精密な研究をすることが今後の課題である。

注

1 「中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成」（東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ65）及び「唐宋茶詩訳注⑨　盛唐の茶詩」（「茶の湯文化学21」二〇一四）を参照。

2 白居易の茶詩については、筆者が、「茶の湯文化学18・19・20」（二〇一一～二〇一三）において、「唐宋茶詩訳注⑥・⑦・⑧　白居易の茶詩（上・中・下）」の題で全作品に訳注を施しているので、参照されたい。

3 テキストは原則として『全唐詩』による。詩の作製年代の推定は、『白居易詩集校注』（謝思煒　中華書店　二〇〇六）に従った。また、資料の作成にあたっては、データベース『全唐詩分析系統』（北京大学数拠分析研究中心・北京燕歌行科技有限公司）を用いた。

4 『三国志・呉書・韋昭伝』に見える、韋昭（韋曜）が、孫皓の宴席で酒の代わりに茶を賜った故事が有名である。これは、『茶経・七之事』にも引かれている。もっとも、これは茶飲料の外貌が酒と似ていたことを示すのみで、茶の特性とかかわるわけではない。

5 高橋「関於《茶経》中的〈盌〉和〈甌〉」（『飲食文化研究』二〇〇九下　二〇〇九）、「中国喫茶史」（『講座日本茶の湯全史　第一巻中世』茶の湯文化学会編　思文閣出版　二〇一三）参照。

6 上掲「中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成」参照。

7 陸游の茶詩について、筆者は、「茶の湯文化学22」（二〇一四刊行予定）に「唐宋茶詩訳注⑩　陸游の茶詩（1）」を掲載し、以降、全作品を訳出する予定である。テキストは原則として『全宋詩』による。詩の作製年代の推定は、『陸游全集校注』（銭仲聯・馬亜中　浙江教育出版社　二〇一一）に従った。また、資料の作成にあたっては、データベース『全宋詩分析系統』（北京大学数拠分析研究中心・北京燕歌行科技有限公司）を用いた。

8 ここに用いられている用語を説明する。「龍茶与羔酒、得失不足評」の、「龍茶」は、北苑で製造された龍団茶（龍の模様がつけられた固形茶）を指し、「羔酒」は、羊肉を用いて醸した「羊羔酒」のことで、雪の日に飲む「羊羔美酒」は、『湘湖近事』に見える陶穀の故事による。「酒惟排悶難中聖」は、『三国志・魏書・徐邈伝』に見える、清酒を「聖人」と呼んだ故事による。「茶却名家可作経」は、陸游と同姓の陸羽が、『茶経』を著したことをいう。「難従陸羽毀茶論」は、『封氏聞見記』に見えるように、陸羽が「毀茶論」を著したことをいう。「寧和陶潜止酒詩」は、「飲酒」で有名な陶潜に「止酒」の詩があることをいう。「品茶未及毀茶妙」と「飲酒何如止酒高」については、すでに述べた。

9 宋は、唐の製墨技術を受け継ぎ、墨匠が輩出した。墨と同様に、練った原料を型にいれて成形する団茶も、北苑を中心に発展した。墨も団茶も、表面に模様が浮き彫りされた堅くて黒い塊という意味では、外見が類似していたし、文人趣味の対象と

なった点でも一致している。蘇軾がその「書墨」において、「茶欲其白、墨欲其黒（茶はその白きことを欲し、墨はその黒きことを欲す）」と述べたのも、両者が類似した存在であることを前提とした議論なのであろう。

10 「琴棋書画」の概念形成と、文房趣味については、青木正児『琴棋書画』（平凡社一九九〇）一三頁以下参照。